川西町埋蔵文化財調査報告書第20集

K-870

下小松古墳群(4)

2001

川西町教育委員会

下小松古墳群(4)

2001

川西町教育委員会

序

この本は平成11年度から平成12年度に川西町教育委員会が明治大学考古学研究室の協力を得て実施した下小松古墳群の分布確認調査とこの古墳群に含まれる前方後円(方)墳の測量調査の報告書です。

昭和58年以来継続してきた調査の成果によって、下小松古墳群は平成12年9月に薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群の3支群、合計179基の古墳が国史跡に指定されました。その一方で、史跡範囲外では緊急発掘調査によって新たな古墳が発見されるなど、古墳群の基礎資料の整備は未だ充分とはいえない状況でした。

ここに報告される古墳の分布確認調査では、史跡範囲の北側、南側それぞれで古墳である可能性が高い小丘が確認されました。これらについては平成12年度から順次遺構の性格を把握するための発掘調査を実施して、古墳群の範囲を確定する作業を進めております。また、群内の前方後円(方)墳は、今回の測量調査によって全てが資料化されたことになります。今後、これらの成果を活用して、多方面の研究や古墳群の保存・整備を推進していかなければなりません。

最後になりましたが、いずれの調査におきましても明治大学の小林三郎教授、現場で指揮をいただいた新井悟講師にはひとかたならぬご指導とご協力をいただきました。また、ともにご協力をいただいた関係各位に感謝申し上げ序といたします。

平成13年3月

川西町教育委員会
教育長　高　橋　　勉

例　　言

1．本書は山形県東置賜郡川西町大字下小松に所在する下小松古墳群の分布確認調査報告、ならびに古墳群に所在する前方後円(方)墳の測量調査の報告書である。

2．調査は川西町教育委員会が主体になり、明治大学考古学研究室の協力を得た。

3．調査期間は、測量調査が平成11年7月28日から8月7日と平成12年11月13日から11月19日、分布確認調査が平成11年10月31日から11月6日である。

4．写真撮影は新井悟、斉藤敏明、澤田悠介が行った。また、K-7号墳に関しては、長谷川毅郎氏（日本写真家協会員）の撮影によるものを含む。

5．調査に関わる図面・写真は川西町教育委員会が保管している。

6．調査体制は以下の通りである。

調査主体	川西町教育委員会
調査担当	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
調査総括	小林　三郎（明治大学教授）
調査主任	新井　悟（明治大学講師）
調査員	古屋　紀之　栃下恵理子　伝田　郁夫　時信　武史 澤田　悠介（以上明治大学大学院）
調査補助員	及川　譲　坂本　竜二　高江　拳史　太田　雅晃 立岩可奈子　山崎　成子　佐藤　祐樹　東出　多恵 向原　崇英　増田　貴寿　南木　貴志　草野　潤平 和地　理子（以上明治大学学生） 佐藤　元希　佐野　恒平　薬田　智之 （以上東北芸術工科大学学生）
整理作業	大鹿　響子　向原　崇英　小川　真　曾根　俊雄 （以上明治大学学生）
事務局	斉藤　敏明（川西町教育委員会文化財専門員）

7．本報告書の編集は、小林三郎の監修のもと、明治大学考古学研究室の協力を得て川西町教育委員会で行った。なお、執筆分担は目次に付したが、各古墳の測量図については斉藤敏明の責で調整した。

目　　次

序
例　言
目　次 …… 4
挿図目次 …… 5
表目次 …… 7
写真図版目次 …… 7

第1章　分布確認調査 …… 9
　第1節　調査の経緯（斉藤敏明） …… 9
　第2節　範囲と方法（斉藤敏明） …… 9
　第3節　調査の結果（斉藤敏明） …… 10
第2章　測量調査 …… 19
　第1節　目的と方法（斉藤敏明） …… 19
　第2節　各古墳の測量成果について（斉藤敏明） …… 20
　第3節　調査の成果 …… 22
　　K－5号墳（時信武史） …… 22
　　K－7号墳（斉藤敏明） …… 24
　　K－9号墳（時信武史） …… 26
　　K－21号墳（時信武史） …… 28
　　K－29号墳（時信武史） …… 30
　　K－31号墳（時信武史） …… 32
　　K－34号墳（時信武史） …… 34
　　K－36号墳（斉藤敏明） …… 36
　　K－42号墳（斉藤敏明） …… 38
　　K－46号墳（時信武史） …… 40
　　K－50号墳（時信武史） …… 42
　　K－53号墳（時信武史） …… 46
　　K－55号墳（時信武史） …… 48
　　K－61号墳（時信武史） …… 50
　　K－68号墳（斉藤敏明） …… 52
　　K－75号墳（時信武史） …… 54
　　K－77号墳（時信武史） …… 56
　　T－9号墳（斉藤敏明） …… 58
　　T－32号墳（時信武史） …… 60
　　T－37号墳（時信武史） …… 62
　　J－1号墳（斉藤敏明） …… 64
第3章　下小松古墳群における造墓活動の展開 …… 66
　第1節　はじめに（新井　悟） …… 66
　第2節　古墳の立地（新井　悟） …… 66
　第3節　切り合い関係からみた墓造りの展開（新井　悟） …… 67
　第4節　前方後円墳の類型分類（古屋紀之） …… 71
　第5節　まとめ（小林三郎） …… 79

挿図目次

第1図　分布確認調査範囲 …… 11
第2図　下小松古墳群古墳分布図 …… 17
第3図　凡　例 …… 21
第4図　K－5号墳測量図① …… 22
第5図　K－5号墳測量図② …… 23
第6図　K－7号墳測量図① …… 24
第7図　K－7号墳測量図② …… 25
第8図　K－9号墳測量図① …… 26
第9図　K－9号墳測量図② …… 27
第10図　K－21号墳測量図① …… 28
第11図　K－21号墳測量図② …… 29
第12図　K－29号墳測量図① …… 30
第13図　K－29号墳測量図② …… 31
第14図　K－31号墳測量図① …… 32
第15図　K－31号墳測量図② …… 33
第16図　K－34号墳測量図① …… 34
第17図　K－34号墳測量図② …… 35
第18図　K－36号墳測量図① …… 36
第19図　K－36号墳測量図② …… 37

第20図　K - 42号墳測量図① …… 38
第21図　K - 42号墳測量図② …… 39
第22図　K - 46号墳測量図① …… 40
第23図　K - 46号墳測量図② …… 41
第24図　K - 50号墳測量図① …… 43
第25図　K - 50号墳測量図② …… 43
第26図　K - 53号墳測量図① …… 46
第27図　K - 53号墳測量図② …… 47
第28図　K - 55号墳測量図① …… 48
第29図　K - 55号墳測量図② …… 49
第30図　K - 61号墳測量図① …… 50
第31図　K - 61号墳測量図② …… 51
第32図　K - 68号墳測量図① …… 52
第33図　K - 68号墳測量図② …… 53
第34図　K - 75号墳測量図① …… 54
第35図　K - 75号墳測量図② …… 55
第36図　K - 77号墳測量図① …… 56
第37図　K - 77号墳測量図② …… 57
第38図　T - 9号墳測量図① …… 58
第39図　T - 9号墳測量図② …… 59
第40図　T - 32号墳測量図① …… 60
第41図　T - 32号墳測量図② …… 61
第42図　T - 37号墳測量図① …… 62
第43図　T - 37号墳測量図② …… 63
第44図　J - 1号墳測量図① …… 64
第45図　J - 1号墳測量図② …… 65
第46図　下小松古墳群における時期と立地との関係 …… 67
第47図　切り合い関係一覧 …… 47
第48図　切り合い関係図 (1) …… 69
第49図　切り合い関係図 (2) …… 70
第50図　前方部の形態による類型分類 …… 74
第51図　墳丘全長の度数分布 …… 74
第52図　墳丘全長の度数分布 …… 75
第53図　前方後円墳集成図 …… 77

表　目　次

第1表　下小松古墳群各支群内訳 …… 10
第2表　下小松古墳群古墳一覧 …… 12
第3表　測量調査実施年月一覧 …… 19
第4表　前方後円墳計測表 …… 72

写真図版目次

pl. 1　K - 5号墳
pl. 2　K - 7号墳
pl. 3　K - 9号墳
pl. 4　K - 21号墳
pl. 5　K - 29号墳
pl. 6　K - 31号墳
pl. 7　K - 34号墳
pl. 8　K - 36号墳
pl. 9　K - 42号墳
pl. 10　K - 46号墳
pl. 11　K - 50号墳
pl. 12　K - 53号墳
pl. 13　K - 55号墳
pl. 14　K - 61号墳
pl. 15　K - 68号墳
pl. 16　K - 75号墳
pl. 17　K - 77号墳
pl. 18　T - 9号墳
pl. 19　T - 32号墳
pl. 20　T - 37号墳
pl. 21　J - 1号墳

第1章　分布確認調査

第1節　調査の経緯

川西町教育委員会では昭和58年の分布確認調査以降、下小松古墳群の調査を継続してきた。昭和60年以降は発掘調査を実施し、これらの結果、平成11年の5月には、薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群の3支群179基の古墳を国指定史跡とするよう文部大臣に答申があった。(平成12年9月21日付け官報によって国指定史跡として告示される。)

一方、既に報告したE-1号・E-2号・E-3号墳の調査は、当初古墳群の範囲外としていた場所で新たな古墳を確認するものであった。国史跡の答申とほぼ時期の重なったこの調査の結果、国史跡範囲の外側でさらに古墳が発見される可能性が高まり、精度の高い分布調査を実施する必要が生じた。

ここで以前の分布確認調査について言及しておきたい。まず昭和58年に実施された調査では国史跡となった3支群に加え、尼が沢支群・永松寺支群の5支群195基の墳丘が確認されている。しかし当時の所見や発掘調査の結果などから尼が沢支群と永松寺支群の2支群については古墳時代の遺構ではないものと認識されるようになった。この間の経過については「1　下小松古墳群の認識の変遷について」(『下小松古墳群(3)』)に詳しいので重複を避けるが、この不完全な認識が新たな調査を必要とした主な事由となった。

また、平成10年秋には国史跡申請のために既知の薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群の3支群について再分布確認調査を行い、未確定であった古墳の総数を確認したうえ、各々の古墳に新たな名称を付して混乱を整理した。この結果については『下小松古墳群(2)』で報告している。

この2次にわたる分布確認調査に加えて今回報告する分布確認調査が第3次の分布確認調査となる。これによって下小松古墳群に括ることが可能な範囲の分布確認調査は完了したこととなる。

第2節　範囲と方法

下小松古墳群は、山形県の南部、福島県との県境となる栂峰から北へ派生する玉庭丘陵の北端、通称眺山丘陵の東面に展開する。今回の分布確認調査では、この丘陵が平野部へ舌状に延びる部分のつけ根にあたる諏訪峠から北側の丘陵主稜線東側およそ350haを対象とした(第1図)。調査期間は1999年10月31日から11月6日の7日間である。

調査方法は徒歩による踏査である。対象地域には、史跡範囲のほかに、北から地形的に、

陣が峰地区・雁境地区・永松寺地区・尼が沢地区・眺山地区・諏訪神社地区の名称を与え、2つの調査班でこれらの尾根稜線と古墳の築造が可能と思われる緩斜面について踏査した。現地でマウンド状の小丘を視認した段階で1／5,000の地形図におおよその地点を落とし、現況で墳丘の形状や規模、周溝や墳頂の陥没の有無等を記録した。また、確認したマウンドには仮の番号を記した杭を打ち、写真を撮影した。

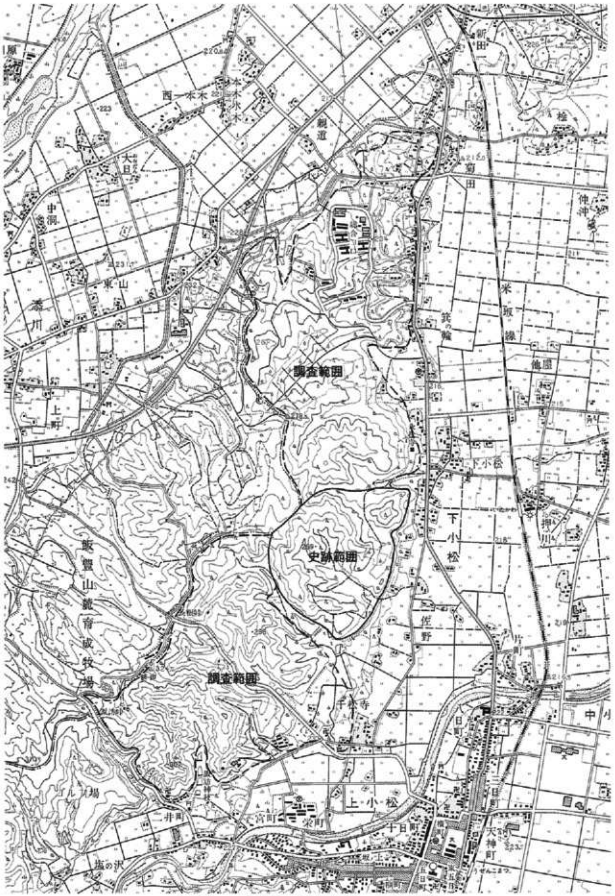
第3節　調査の結果

この調査により、陣が峰地区・永松寺地区・尼が沢地区において新たなマウンドの分布が認められ、また、史跡範囲においても小森山支群で4基、鷹待場支群でも1基の新発見のマウンドが確認された。

新たなマウンドの分布があった3地区について、本報告では便宜上それぞれを下小松古墳群を形成する支群の1つとみなし、陣が峰支群・永松寺支群・尼が沢支群とした。また、これらのマウンドについても便宜上古墳との呼称を用いている。これについては、今後順次主要なものを発掘調査にすることによって古墳との確証を得る作業を行う予定である。今回の分布確認調査によって確認されたマウンドの数は第1表の通りである。なお、第2表には全ての古墳のデータを集成した。従来円墳とみなしていた鷹待場支群T-32号墳は2000年に行った測量調査結果の検討により、墳形を前方後円墳に変更している。

第1表　下小松古墳群各支群内訳

	前方後円墳	前方後方墳	円　墳	方　墳	合　計
陣が峰支群		1		2	3
永松寺支群			6	2	8
薬師沢支群			40	12	52
鷹待場支群	3		23	17	43
小森山支群	17		62	9	88
尼が沢支群				8	8
合　計	20	1	131	50	202



第1図　分布確認調査範囲（S＝1／25,000）

第２表　下小松古墳群古墳一覧

（ゴシックは発掘調査によって得られた値）

陣が峰支群

古墳名	墳　形	規模（東西×南北）m	主体部	備　考	山寄せ	陥没	周溝	調査歴	文献
J－1	前方後方	**全長 17.8　後方部幅 12.4** 前方部幅 4.6	割竹形木棺？直葬３	墳頂盛土上面：土師器高坏・装飾器台・直口壺 周溝：土師器二重口縁壺			○	2000年	④
J－2	方	7.2×7.2　高さ1.0	不明						④
J－3	方	7.2×7.2　高さ1.0	不明				○	2000年	④

永松寺支群

古墳名	墳　形	規模（東西×南北）m	主体部	備　考	山寄せ	陥没	周溝	調査歴	文献
E－1	円	**不明×12.0　高さ1.4**	箱形木棺直葬 不明×1.4	主体部：やりがんな１ 周溝：土師器壺１			○	1999年	③
E－2	方	**13.1×12.4　高さ1.8**	不明	墳頂盛土上面：土師器高坏脚部			○	1999年	③
E－3	方	**10.9×10.4　高さ1.7**	不明	墳頂盛土中：土師器壺胴部				1999年	③
E－4	円	5.6×6.6　高さ1.0							④
E－5	円(楕円)	4.8×5.0　高さ0.4							④
E－6	円	4.5×4.7　高さ0.5							④
E－7	円(楕円)	4.2×4.5　0.7							④
E－8	円	25.2×18.8　高さ3.4					○		④

薬師沢支群

古墳名	墳　形	規模（東西×南北）m	主体部	備　考	山寄せ	陥没	周溝	調査歴	文献
Y－1	方	16.4×18.8　高さ3.4					○		②
Y－2	方	17.2×18.7　高さ4.2					○		②
Y－3	方	13.9×14.9　高さ3.5					○		②
Y－4	円	8.8×8.7　高さ2.7			○				②
Y－5	円	10.4×11　高さ2.7			○	○	○		②
Y－6	円	10.3×9.4　高さ2.5			○				②
Y－7	円	10×11.3　高さ2.0					○		②
Y－8	円	10.8×14.5　高さ3.6			○				②
Y－9	円	11.2×9.6　高さ2.1			○				②
Y－10	円	9.8×11.1　高さ3.3			○		○		②
Y－11	円	8.0×8.8　高さ1.9			○		○		②
Y－12	円	9.2×10.5　高さ2.7			○		○		②
Y－13	円	7.4×8.4　高さ3.6			○	○	○		②
Y－14	円	8.0×9.5　高さ2.3			○	○			②
Y－15	円	6.4×6.8　高さ2.7			○				②
Y－16	円	5.6×6.5　高さ2.0			○				②
Y－17	円	8.6×7.8　高さ2.4			○				②
Y－18	円	9.1×9.1　高さ2.8			○				②
Y－19	円	6.5×8.2　高さ2.4			○				②
Y－20	円	9.7×10.7　高さ3.7			○				②
Y－21	円	7.8×9.3　高さ2.7			○				②
Y－22	方	11×10.5　高さ2.1			○	○	○		②
Y－23	方	10.4×7.2　高さ2.1			○		○		②
Y－24	円	9.4×10.5　高さ2.8			○	○	○		②
Y－25	円	10.9×11.8　高さ3.5			○				②
Y－26	円	12×11.1　高さ3.4			○	○	○ (3ヵ所)		②
Y－27	方	14.4×13.8　高さ3.5				○	○		②
Y－28	方	18.3×17　高さ3.5				○	○		②
Y－29	方	8.6×8.8　高さ3.4			○		○		②
Y－30	円	9.7×7.7　高さ2.2			○				②
Y－31	円	11.4×9.3　高さ3.4			○		○		②
Y－32	円	12.4×12.6　高さ3.4			○				②
Y－33	円	10.7×10.1　高さ3.5			○		○		②
Y－34	円	7.3×7.2　高さ2.4			○				②
Y－35	円	8.6×8.3　高さ2.9			○				②
Y－36	方	13.9×11.8　高さ3.0			○				②
Y－37	円	11.6×8.9　高さ3.3			○				②
Y－38	円	9.2×8.6　高さ2.3			○				②
Y－39	円	9.8×9.9　高さ3.7			○				②
Y－40	円	9.0×9.9　高さ3.9			○		○		②
Y－41	円	7.8×8.1　高さ2.7			○		○		②
Y－42	円	13.0×12.4　高さ3.9			○		○		②
Y－43	方	9.5×7.8　高さ1.6					○		②
Y－44	方	15.8×13.0　高さ2.3					○		②
Y－45	円	10.6×10.2　高さ3.1			○		○		②
Y－46	円	6.6×6.6　高さ1.4			○				②
Y－47	円	13.0×12.6　高さ3.8			○	○	○		②
Y－48 (旧143)	円	**13.5×13.5　高さ3.4**	木棺直葬 2.5×0.6	主体部： 鏃１ 鉄剣１・刀子２ U字形鏃先１ 竪櫛３　鉄鏃28	○		○	1987年	①
Y－49	円	9.1×8.9　高さ2.7			○	○			②
Y－50	方	10.5×12.1　高さ3.4			○	○			②
Y－51 (旧145)	円	**23×23　高さ4.5**						1987年	②
Y－52	円	10.7×13.5　高さ5.3			○	○			②

鷹待場支群

古墳名	墳　形	規模（東西×南北）m	主体部	備　考	山寄せ	陥没	周溝	調査歴	文献
T－1	方	**14.7×15.9　高さ1.8**	木棺直葬 3.8×0.8	主体部： 大刀１　鉄鏃10 U字形鏃先１ 鑓子１　竪櫛２			○	1998年	②
T－2	円	13.9×13.5			○	○	○		②
T－3	円	7.6×7.7			○		○		②
T－4	方	12.4×12.0				○	○		②
T－5	円	13.4×13.6			○	○	○		②
T－6	円	10.1×10.4					○		②
T－7	円	6.7×7.4			○				②
T－8	円	7.2×8.5			○	○	○		②
T－9	前方後円	**全長 19.6　後円部径 11.8** 前方部幅 5.6　**後円部高 2.0** **前方部高 1.2**	木棺直葬 3.1×0.7	主体部： 鉄鏃 19 U字形鏃先１	○	○		1997年	②
T－10	方	14×11.4　高さ2.4							②
T－11	方	12×11.5　高さ2.2			○				②
T－12	円	7.6×8　高さ2.5			○				②
T－13	方	11.5×12.3　高さ2.5			○				②
T－14	方	10.1×8.4　高さ2.4			○				②
T－15	円	8.1×10.1　高さ1.6			○		○		②
T－16	円	4.8(現状倒平)×9.6　高さ1.7			○				②
T－17	方	10.1×12.9　高さ2.5			○				②
T－18	円	7.7×7.4　高さ1.8			○		○		②
T－19	円 かなり不整形	9.4×12.8　高さ0.9							②
T－20	方	10.4×8.3　高さ0.9							②

T-21	方	12.3×14.3 高さ1.1							②
T-22	方	12.5×13 高さ0.8			○		○		②
T-23	円	10.5×8.4 高さ3.0			○	○			②
T-24	円	6.3×7.2 高さ1.3							②
T-25	円	8.1×9.1 高さ2.5			○		○		②
T-26	方	7×10 高さ1.8							②
T-27	円	11×11 高さ2.7			○	○	○		②
T-28	方	5.4×8.5 高さ1.0							②
T-29	円	14.6×17.1 高さ2.5					○		②
T-30	円	8.5×9 高さ0.9							②
T-31	円	8.9×8.3 高さ1.1				○			②
T-32	前方後円	全長21.6 後円部径17.0 前方部幅4.8 前方部高さ0.8							②
T-33	方	9.5×10.5 高さ1.6				○			②
T-34	円	11.3×11.3 高さ1.9			○	○	○		②
T-35	円	13.7×11.6 高さ1.1							②
T-36	方 東側に一辺1mの張り出し	16×15 高さ2.0							②
T-37	前方後円	全長27.2 後円部径17.4 前方部幅9.9 後円部高さ1.1 前方部高さ0.4							②
T-38	円	13×12.6 高さ0.9					△		②
T-39	円	10.7×10.3 高さ0.9				○	○		②
T-40 (旧105)	方	11.5×7.0 高さ1.0	不明				○	1986年	①
T-41 (旧106)	方	**24.0×19.4 高さ3.8**	木棺直葬 6.7×1.7	主体部： 大刀1 刀子1 ガラス小玉4 整備1			○	1986年 1995年	① ②
T-42 (旧186)	方	**22.0×23.0 高さ5.2**	不明	周溝内： 土師器壺・甕・杯			○	1986年 1995年	① ②
T-43	円	径10m以下（削平）							②

小森山支群

古墳名	墳形	規模（東西×南北）m	主体部	備考	山寄せ	陥没	周溝	調査歴	文献
K-1	円	11×11.3 高さ2.8			○	○			②
K-2	円	11.2×11.6 高さ1.6							②
K-3	円	12.2×11.3 高さ2.9			○		○		②
K-4	円	12.3×12.3 高さ3.1			○	○	○		②
K-5	前方後円	全長24.4 後円部12.2 高さ3.3					○		②
K-6	円	7.9×8 高さ1.7							②
K-7 (旧98)	前方後円	**全長26.5 後円部径18** **前方部幅6.5 くびれ部幅5.5** **後円部高さ3 前方部高さ1.5**	木棺直葬 6.5×2	主体部上： 土師器(杯2・甕) 須恵器(壺・高杯)	○			1991年 / 1993年	①
K-8	方	11.7×11.3 高さ1.3					○		②
K-9 (旧100)	前方後円	全長23.3 後円部16.7 高さ2.8 前方部幅6.1				○	○		②
K-10	円	14.7×13.4 高さ3.1				○	○		②
K-11	円	13×13 高さ3.0					○		②
K-12	円	13.2×12.7 高さ2.6				○	○		②
K-13	円	11.7×11.9 高さ3.7				○	○		②
K-14	方	10.7×11.4 高さ1.6							②
K-15	円	11.4×11.3 高さ2.0				○			②
K-16	円	11.7×11.2 高さ1.2			○	○	○		②
K-17	円	7.5×8.9 高さ2.1			○	○	○		②
K-18	円	12.4×12.4 高さ2.4			○	○ (2ヶ所)	○		②

K-19	円	10.6×11.6 高さ2.0			○		○		②
K-20	円	12.2×11.3 高さ2.4					○		②
K-21 (旧87)	前方後円	全長20.8 後円部15.0 前方部幅6.5 高さ3.61			○	○	○		②
K-22	円	12.0×11.7 高さ1.9			○	○	○		②
K-23	円	16.3×16 高さ3.0				○	○		②
K-24	円	7.5×8.5 高さ1.5			○	○	○		②
K-25	円	10.2×10.4 高さ2.4			○	○	○		②
K-26	円	9.3×9.6 高さ1.5			○	○	○		②
K-27	円	8.3×8.8 高さ2.3				○	○		②
K-28	円	11×11.8 高さ2.0			○	○			②
K-29 (旧75)	前方後円	全長21.5 後円部径13.0 前方部幅7.8 高さ2.8					○		②
K-30	円	7.7×8.3 高さ1.0				○	○		②
K-31 (旧73)	前方後円	全長20.3 後円部径13.8 前方部幅6.9 高さ1.9				○	○		②
K-32	円	9.3×9.4 高さ1.3							②
K-33	円	5.6×5.5 高さ0.7							②
K-34									②
K-34 (旧63)	前方後円	全長21.7 後円部径13.5 前方部幅6.3 高さ2.5				○	○		②
K-35 (旧77)	円	**6.7×7.3 高さ0.6**	木棺直葬 2.7×1.1	刀子			○	1988年	①
K-36 (旧61)	前方後円	**全長25.5 後円部径15.0** **前方部幅9 後円部高さ2** **前方部高さ1.4**	木棺直葬2 ①3.5×1.0 ②4.2×1.0	周溝内： 土師器杯・甕 第1主体： 大刀1・環状鉄製品1・鉄鏃3 第2主体： 鉇1・刀子1・鉄鏃			○	1985年	①
K-37 (旧64)	円	**7.5×7.5 高さ1.2**	木棺直葬 2.5×0.8	刀子			○	1985年	①
K-38 (旧62)	円	4.5×5.4 高さ1.7							②
K-39 (旧69)	円	9.5×9 高さ1.7					○		②
K-40	円	11.9×11.3 高さ3.2			○	○			②
K-41 (旧68)	円	8.9×9.2 高さ1.5				○	○		②
K-42 (旧65)	前方後円	**全長22.3 後円部径14.5** **前方部幅8.8 くびれ部幅6.9** **後円部高さ2.1** **前方部高さ1.2**		周溝： 土師器壺・甕・杯			○	1988年	①
K-43 (旧71)	円	9.5×9.3 高さ1.8							②
K-44 (旧66)	方	9.4×9.1 高さ1.5				○	○		②
K-45 (旧67)	円	11.8×11.6 高さ1.7				○	○		②
K-46 (旧72)	前方後円	全長21.8 後円部径13.1 前方部幅9.4 高さ2.4				○	○		②
K-47	円	7.9×8.7 高さ1.5					○		②
K-48	円	9.9×9.2 高さ3.1			○	○	○		②
K-49	方	10.8×10.4 高さ2.7			○	○	○		②
K-50 (旧78)	前方後円	全長33.8 後円部径19.9 前方部幅12.6 高さ4.4				○	○		②
K-51	円	10×10.9 高さ1.1							②
K-52	円	9.3×8.3 高さ0.9					○		②
K-53 (旧67)	前方後円	全長21.6 後円部径15.4 前方部幅8.1 高さ2.8				○	○		②
K-54	円	7.9×8.6 高さ1.0				○			②

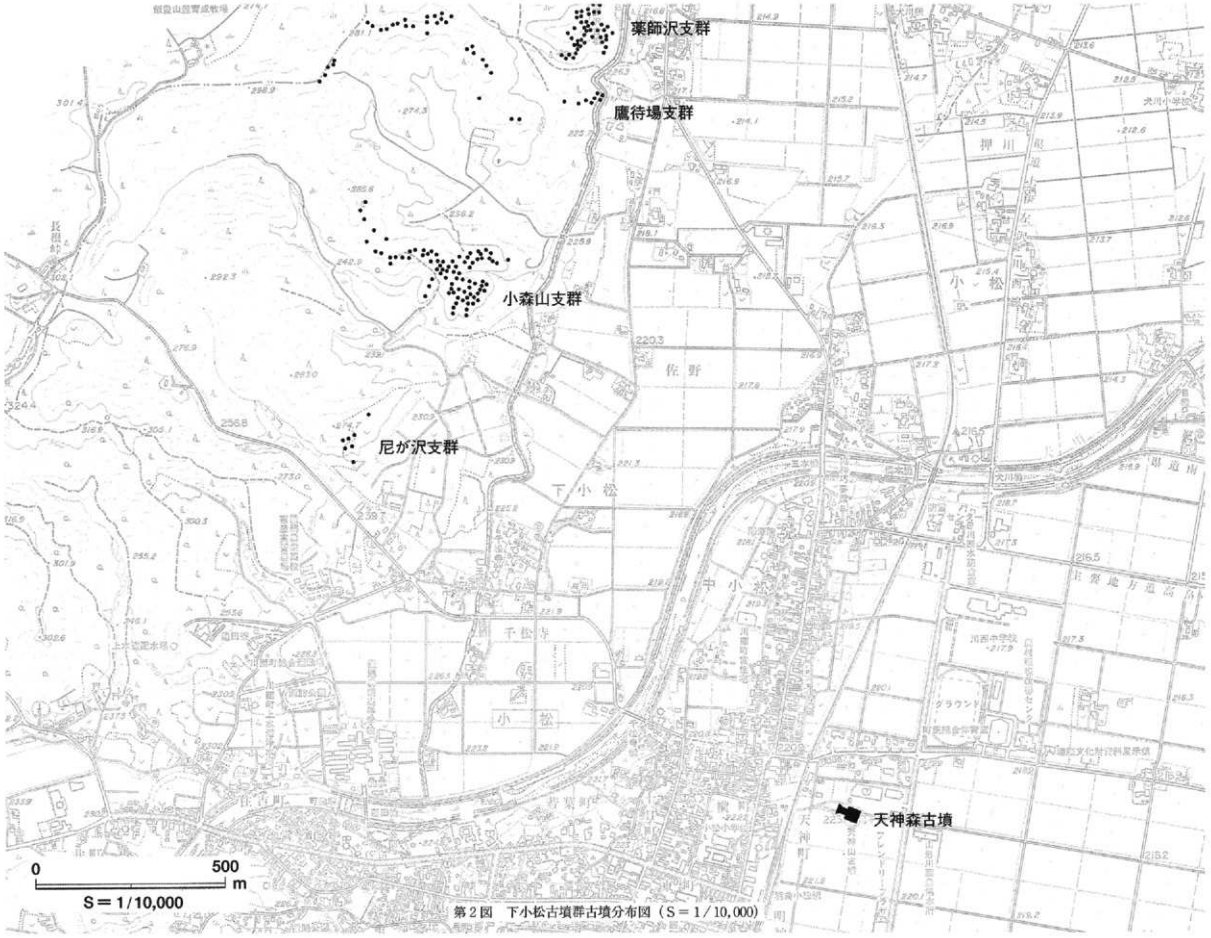
K－55 (旧 58)	前方後円	全長 20.1　後円部径 13.3 前方部幅 7.4　高さ 1.6				○	○		②
K－56	円	12.8×13.3　高さ 1.3				○	○		②
K－57	円	9.1×10.0　高さ 1.7				○	○		②
K－58	円	10.5×10.5　高さ 2.1					○		②
K－59	円	14.2×14.2　高さ 2.4					○		②
K－60	円	13.7×14　高さ 2.2					○		②
K－61 (旧 53)	前方後円	全長 22.5　後円部径 14.3 前方部幅 6.9　高さ 2.6				○	○		②
K－62	方	12.5×12.3　高さ 1.5				○	○		②
K－63	円	11.2×10.5　高さ 3.0							②
K－64	円	11.3×11.7　高さ 2.7			○		○		②
K－65	円	11.6×12.3　高さ 1.6							②
K－66 (旧 33)	円	10.1×9.7　高さ 1.5							②
K－67	円	15.7×14.2　高さ 2.5				○	○		②
K－68 (旧 40)	前方後円	**全長 21.9　後円部径 14.0** **前方部幅 5　くびれ部幅 3.3** **後円部高さ 0.4** **前方部高さ 0.2**	木棺直葬 2 西：6×1.8 東：4.7× 1.1	西主体部： 刀子 1 東主体部： 鉄刀 1・土師器 椀		○	○	1993 年 1994 年	①
K－69	円	9.9×9.1　高さ 1.9							②
K－70	円	11.3×12.4　高さ 1.6				○			②
K－71	円	11×11.6　高さ 1.7				○	○		②
K－72	方	9.9×8.2　高さ 1.2					○		②
K－73	円	8.8×7.7　高さ 0.93							②
K－74	円	9.2×8.8　高さ 1.4							②
K－75 (旧 48)	前方後円	全長 18.0 後円部径 11.8×10.5 前方部幅 6.4　高さ 2.8					○		②
K－76	円	10.6×10.5　高さ 1.5				○			②
K－77 (旧 50)	前方後円	全長 17.8　後円部径 11.8 前方部幅 5.8　高さ 3.5			○	○	○		②
K－78	円	7.6×7.9　高さ 2.1			○		○		②
K－79	円	6.9×7.1　高さ 1.4							②
K－80	円	8.0×8.6　高さ 1.5			○				②
K－81	方	12.9×11.9　高さ 1.4				○			②
K－82	方	11.6×11.2　高さ 1.9				○	○		②
K－83	方	9.2×9.8　高さ 1.6			○				②
K－84	円	10.3×10.8　高さ 1.7			○	○	○		②
K－85	円	4.9×4.3　高さ 1.0			○				④
K－86	円	9.9×8.7　高さ 2.8							④
K－87	円	7.2×6.5　高さ 2.3							④
K－88	円	6.2×5.8　高さ 1.8			○				④

尼が沢支群

古墳名	墳　形	規模（東西×南北）m	主体部	備　考	山寄せ	陥没	周溝	調査歴	文献
A－1	方	22.0×21.5　高さ 2.7							④
A－2	方	9.3×9.0　高さ 1.2			○	○			④
A－3	方	7.1×5.4　高さ 1.3			○	○			④
A－4	方	3.6×3.4　高さ 0.6				○			④
A－5	方	4.1×3.2　高さ 0.7							④
A－6	方	3.4×3.7　高さ 0.8							④
A－7	方	11.0×11.0　高さ 1.9			○				④
A－8	方	20.0×14.0　高さ 2.5							④

参考文献　①『下小松古墳群（1）』　川西町教育委員会　1995
②『下小松古墳群（2）』　川西町教育委員会　1999
③『下小松古墳群（3）』　川西町教育委員会　2000
④　本書

飯豊町
陣が峰支群
永松寺支群
長井市
飯豊町
飯豊山麓育成牧場
菊田
仲沖
笑の輪
池屋
駅前



第２図　下小松古墳群古墳分布図（S＝1／10,000）

第2章　測量調査

第1節　目的と方法

今回の調査では、分布確認調査で明らかになった21基の前方後円（方）墳の測量図を揃え、基礎データを整備し公表することを目的とした。ただし、既にK-9・K-36・K-42・K-64・T-9号墳については発掘調査に伴って測量を終えていた。また、J-1号墳については、2000年度に調査が予定されていたため1999年度の調査対象からは除外し、合計16基の古墳の測量を行うこととした。しかし実際には1999年度に測量を終えた古墳は14基で、残る2基については2000年度に持ち越すことになった。各古墳の測量時期等は第3表の通りである。

調査の方法は、各支群ごとに設定した閉鎖トラバースによる平板測量である。各古墳の縮尺1／100の平面図を作成するために、絶対標高に適合させた25cm間隔の等高線と、墳

第3表　測量調査実施年月一覧

古　墳　名	測量調査年月	発掘調査年	文　　献	備　　考
K-5号墳	1999年11月			
K-7号墳	1990年　8月	1990年～1992年	下小松古墳群(1)	旧98号墳
K-9号墳	1999年11月			旧100号墳
K-21号墳	1999年　8月			旧87号墳
K-29号墳	1999年　8月			旧75号墳
K-31号墳	1999年　8月			旧73号墳
K-34号墳	1999年　8月			旧63号墳
K-36号墳	1985年　5月	1985年	下小松古墳群(1)	旧61号墳
K-42号墳	1988年　6月	1988年	下小松古墳群(1)	旧65号墳
K-46号墳	1999年　8月			旧72号墳
K-50号墳	1999年　8月			旧78号墳
K-53号墳	1999年　8月			
K-55号墳	1999年　8月			旧58号墳
K-61号墳	1999年　8月			旧53号墳
K-68号墳	1993年　7月	1993年・1994年	下小松古墳群(1)	旧40号墳
K-75号墳	1999年　8月			旧48号墳
K-77号墳	1999年　8月			旧50号墳
T-9号墳	1997年　8月	1997年	下小松古墳群(2)	
T-32号墳	2000年11月			
T-37号墳	2000年11月			
J-1号墳	2000年　5月	2000年		

丘と地形改変面の傾斜変換線を計測した。測量範囲は各古墳と周辺の人為的な地形改変面、さらに古墳築造以前の地形が理解できる程度の自然地形とした。ただし、川西町と飯豊町の境界に位置するT-37号墳については、飯豊町側の地権者の同意が得られず、測量調査は川西町側のみとなった。

第2節　各古墳の測量成果について

この報告において、それぞれの古墳について二種類の図を示している。等高線のみの測量図と、傾斜変換線や主体部の落込みに伴う墳頂部の陥没範囲など副次な情報を加えた図で、それぞれ1／200のスケールで掲載した。方位は磁北を示し、墳丘の主軸方位は前方部が北から何度の偏りを持つかを数値で示した。

すでに発掘調査を行っている古墳については、この度測量した古墳と図の体裁を統一するために測量原図をもとに再トレースを行っている。この時、K-7・K-36・K-42・J-1号墳では測量時の20㎝間隔の等高線を25㎝間隔に補正している。

墳丘各部の計測値は、発掘調査を終えている古墳では発掘調査によって得られた数値を、測量調査のみ終えている古墳では測量調査によって得られた数値を掲載した。これにより、かつて『下小松古墳群（2）』で示した値と異なる結果になっているものがある。これらについては今回の報告の値を優先するものとする。なお、本報告では発掘調査の成果を図示していない。これらについては既報告を参照されたい。

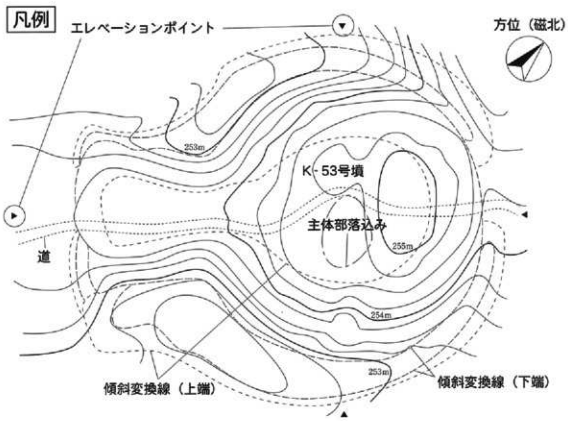
さて、各古墳の記述で使用するいくつかの用語について触れておきたい。各古墳や周辺の地形を指し示すとき、学史的に定着している適当な用語がない場合、あるいは通常使われるニュアンスとはやや異なる意味で使っている場合がある。これらについてはここで定義を行って使用するものとしたい。

地形改変面：自然地形に人為的に手を加えた部位。

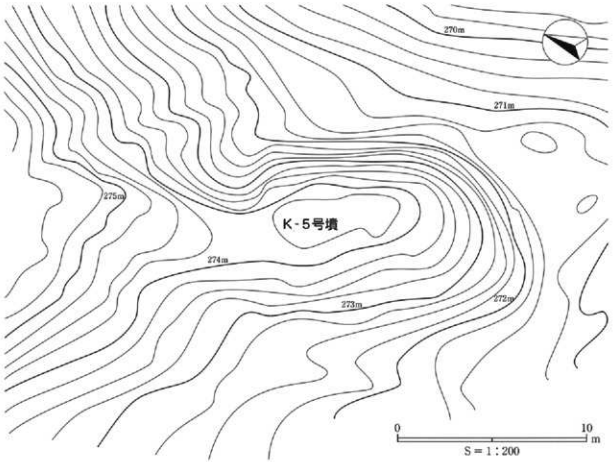
テラス：地形改変面のうち平坦に整形された部位。なお、墳丘の段築成による平坦面はここでは該当するものがない。

周溝：地形改変面のうち古墳周囲の溝状に整形された部位。部分的に途切れるものもある。自然地形と墓域とを画す意図が読み取れるものと墳形の形を整える結果として周溝の形態を示すものとの2通りがあると思われる。

切り合い関係：各古墳とそれに伴う地形改変面が隣接する古墳同士で霧ある状況。微地形の観察によって該当する古墳間の時間的な関係を判断できる場合が多い。



第3図　凡　例



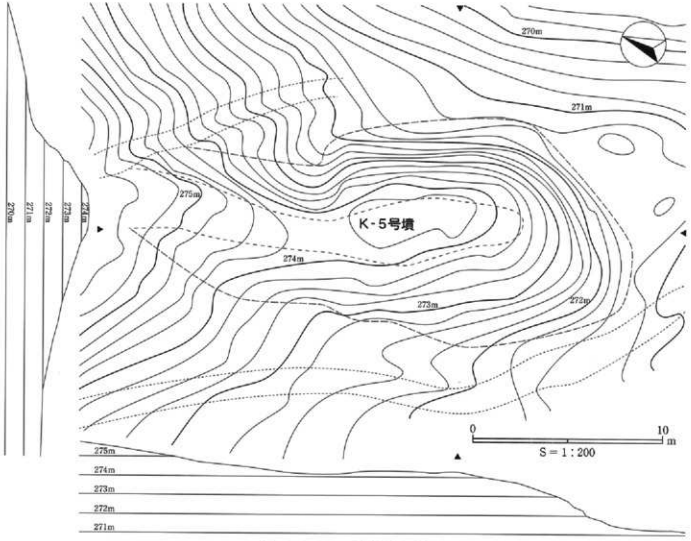
第4図　K-5号墳測量図①

K-5号墳

鷹待場支群の西端から、南に向って緩やかに下降してくる尾根が馬の背状に幅を狭めた後、再び高さと幅を持った尾根が発生し、さらに南東に向って下っている。本古墳はその尾根の稜線より僅かに西に寄った所に、前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、尾根上方の前方部前端付近が最も高く、後円部が最も低くなっており、その比高差は約4mである。墳丘の東西においても墳裾のレベルは異なっており、後円部両側面で計測すると、東側は西側に比べて約1m低い。墳裾最低点は標高約272mである。南東約40mにK-9号墳が存在する。

墳丘主軸はN-21°-Wを測る。本古墳は測量図からも分かるように、等高線のみでは前方後円墳としての形をはっきりと読み取ることは困難であるが、明らかに人為的に構築された高まりである事から古墳であると判断した。墳丘築造後に大きな人為的な改変を受けているとは考えられないが、墳丘西側は封土が自然流出している可能性がある。以下第4図に基づいて説明する。

後円部は、測量図からも分かるように全体として楕円形を呈している。後円部東側は、丸く膨らむことなく直線的である。後円部南半に至ってようやく円を描くようになり、西



第5図　K-5号墳測量図②

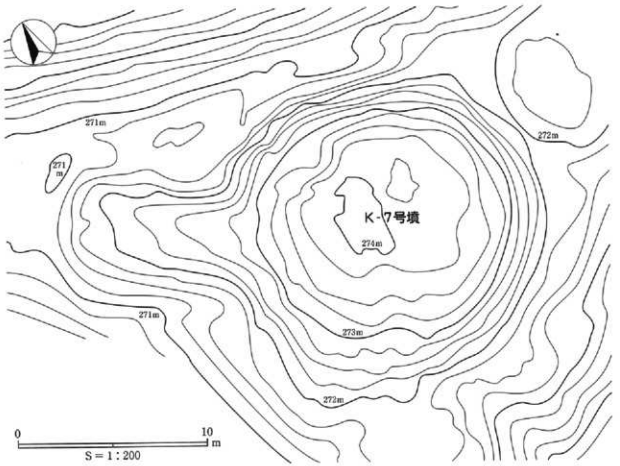
側に至る。西側は、東側ほど直線的ではないが円を描いているとは言い難く、結果、後円部は全体として隅丸長方形を呈している。側面の傾斜は西側は緩やかであるが、東側は急である。この事は前方部に関しても同様である。墳頂平坦面も狭長な楕円形である。この狭い墳頂平坦面上には埋葬主体部の腐朽に伴う陥没は確認できなかった。

前方部は、前端には周溝などは掘り込まれておらず、自然地形との境界は明瞭でない。等高線が後円部に向かって屈曲している事からこの範囲を前方部として認識できる。後円部から明瞭な境をもつことなく連続してきた墳頂平坦面は前方部に向かって緩やかに上昇し、そのまま明瞭な段差などをもたずに自然地形へと移行している。

くびれ部は、後円部が楕円形であることと、前方部があまり開かないことから、明瞭にはくびれていない。

周溝及びテラス面の存在は確認できなかった。

以上のことから、本古墳は南東向きの斜面地に、後円部を盛土によって、前方部は若干の地山の削り出しと盛土によって築造されていると考えられる。



第6図　K-7号墳測量図①

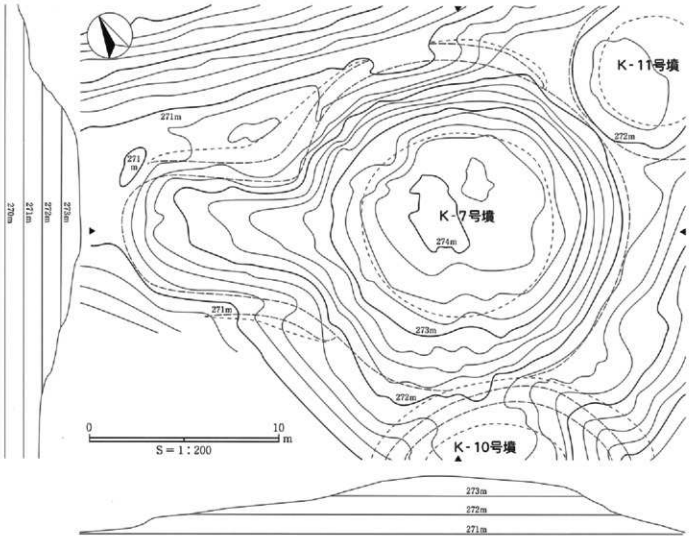
K-7号墳（1990年発掘調査）

K-7号墳は、南北に蛇行しながら延びる丘陵の主稜線が標高を下げながら小尾根を分化していく中で、南東へ派生する比較的大きな尾根の小ピーク上に位置する。この尾根はさらに高度を下げると小森山支群の中心へ延びる。最も高い後円部墳頂の標高はおよそ274m、墳裾の標高は271mから272mである。墳丘主軸の方位はN-63°-Wで、尾根の上方に前方部を、下方に後円部を向けている。

この個所でほぼ東西に延びている尾根は、北斜面に顕著なテラスがあり、幅2m程で尾根線と平行して直線的に延びている。このテラスが人為的なものか自然地形なのかは不明であるが、これによってK-7号墳とこれに続くK-8号墳・K-9号墳は、北寄り、とりわけ北東方向から眺めると直線的に整形された壇状の地形の上部に造られたような特異な印象を与えている。

また、K-7号墳の周囲には、K-8号墳・K-10号墳・K-11号墳の3基の小墳が裾を接するように立地し、中でもK-10号墳はK-7号墳の裾を削って築造されていることが発掘調査により明らかになっている。

この発掘調査は、1990年から3カ年間かけて行われており、墳形に関してはほぼ全容が解明している。K-7号墳は全長26.5m、後円部径18m、くびれ部幅5.5m、前方部前端幅

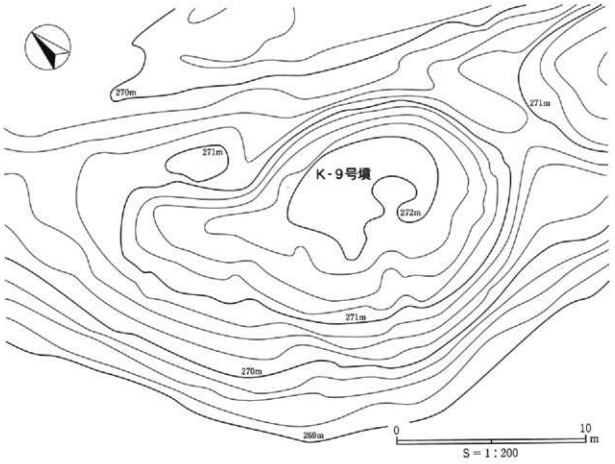


第7図　K-7号墳測量図②

6.5mを測る前方後円墳である。墳丘の高さは後円部で約3m、前方部で約1.5mであり、全体の印象としては後円部に比して前方部が小さく、後円部と前方部の比高差が大きいのも特徴である。後円部径：前方部長はほぼ2：1の割合である。前方部が小さく低いのは一般に前期古墳に見られる特徴であるが、K-7号墳からは須恵器の出土があり古墳時代後期の築造である。

墳丘そのものはやや西方向に崩れているが残りは良く、墳裾がほぼ同じ標高で巡るため等高線も前方後円形にきれいに巡る。墳頂は平坦で大きな凹みは見られないが、南寄りの等高線が若干乱れているのは、後円部南寄りに造られた大きな埋葬主体の影響であろう。前方部は直線的で殆ど開かず、後円部側から前端に向けて徐々に標高を落とす。周溝は所々に巡るが全周はしない。前方部前端、南側くびれ部、後円部東側、後円部北側から北側くびれ部にかけて幅1～2m、深さ0.5m程の狭く浅い溝が巡る。

発掘前の測量と墳丘周囲の発掘の結果を合わせて勘案すると、墳丘の南から南西にかけては、墳丘の崩落が測量図に影響しているが、その他では現況で認められる墳裾の位置は発掘調査によっても平面的にはそれほど変化しない。南側を中心とした墳丘の崩落は、一時に進む融雪の影響も考えられよう。



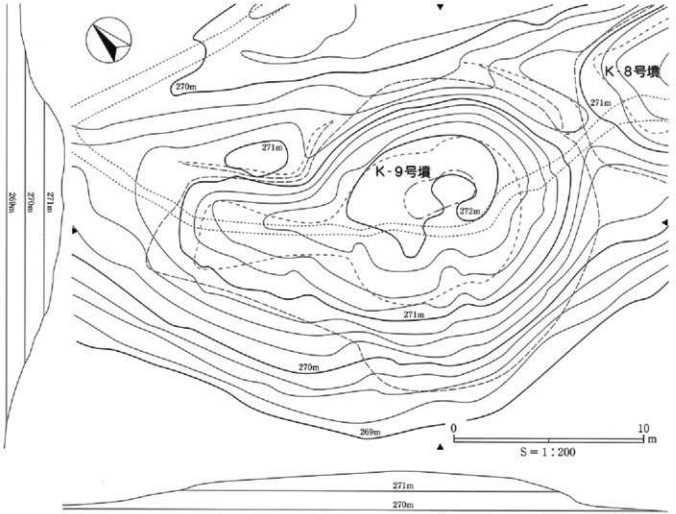
第8図　K-9号墳測量図①

K-9号墳

K-5号墳がのっている尾根が、僅かな鞍部を挟んで南東に向かって弧を描いて伸びている。K-9号墳はこのほとんど標高差の無い尾根の稜線よりやや南に寄った所に前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端にはほとんど比高差がない。一方、墳丘の北側と南側では若干の比高差を生じており、後円部では南側が北側より約0.7m低い。墳裾最低点は標高約270mである。北西約40mにK-5号墳、南西約40mにK-7号墳が存在する。

墳丘主軸はN-48°-Wを測る。古墳は測量図からも分かるように、墳丘の北側と南側では大きく異なっている。これは封土の自然流出によるものと考えられる。後円部後端のK-9号墳との間にみられるブリッジ状の高まりは、後世小道として利用された時に付け加えられたものである。以下第8図に基づいて説明する。

後円部は、北側はくびれ部から整った円形を描いて後円部後端に至る。これより南側は、くびれ部に向かって大きく南に等高線が膨らんでおり、北側とは対称になっていない。墳



第9図　K-9号墳測量図②

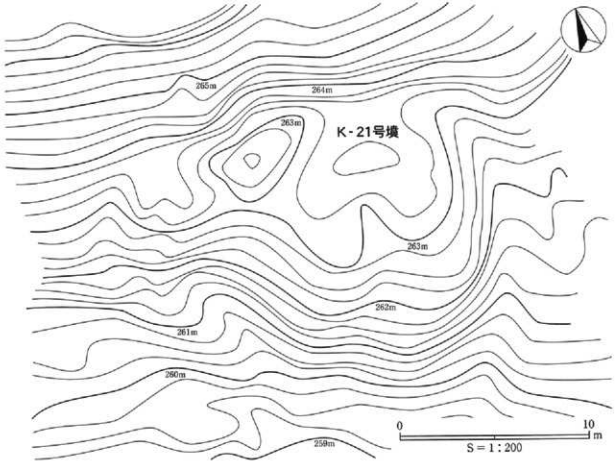
頂平坦面も同様に南側に膨らんでいる。側面の傾斜は北側は急であるが、南側は緩やかである。この事は前方部に関しても同様である。後円部墳頂の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端に約0.5mの比高差をもっており、これによって前方部前端を認識できる。前方部北側辺は、前端に向かってやや開いているが、南側辺はほとんど開いていない。後円部から明瞭な境をもつことなく連続してくる墳頂平坦面は前端に向かって緩やかに下降している。

くびれ部は、北側は明瞭に屈曲しているが、南側は、明瞭なくびれを形成していない。

墳丘北側には周溝とこれに連続するテラス面が存在している。

以上のことから、本古墳は標高差のほとんど無い尾根上に、墳丘北側を地山の削り出しと盛土によって、南側は盛土によって築造されていると考えられる。



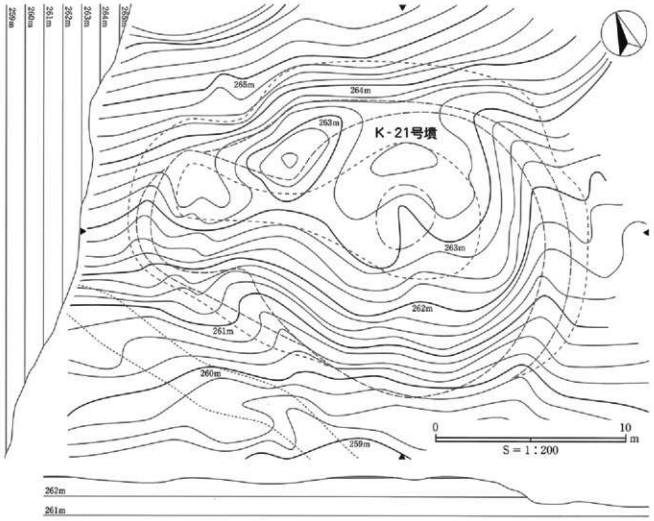
第10図　K-21号墳測量図①

K－21号墳

K-5・9・7号墳の立地している弧状の尾根がK-7号墳をすぎたところで小さな鞍部を挟んで東にのび、さらに南東方向に向って緩やかに下っている。本古墳はこの尾根の南斜面に、墳丘主軸を自然地形の等高線と平行させるように築造されている。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端に約1.3mの比高差を生じている。山側の後円部北側墳裾と谷側の南側墳裾との比高差は約3.6mであり、本古墳が山寄せであることを良く示している。墳丘最低点は標高約260mである。南約50mにK-53、東約60mにK-29号墳が立地している。

墳丘主軸はN-71°-Wを測る。等高線のみでは前方後円墳としての形を読み取るのは困難である。前方部南側コーナーは攪乱によって破壊されている。以下第10図に基づいて説明する。

後円部は、斜面の下になる南側が大きく膨らんでいる。しかし、全体的には円形をていしているといえる。後円部墳頂中央付近の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没



第11図　K-21号墳測量図②

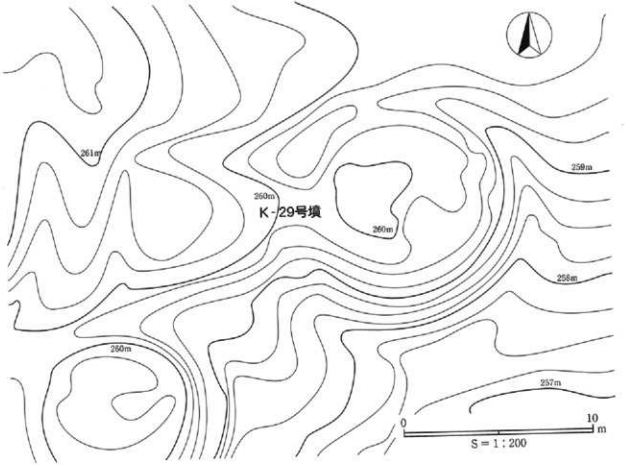
によって引き起こされたものである。

前方部は、周溝底と前方部墳頂平坦面との比高差が約0.5mで、前方部前端は明確に認識できる。南北両側辺は前端に向かって緩やかに開いている。墳頂平坦面のレベルは後円部からくびれ部に向かって緩やかに下がり、前方部前端に向かって緩やかに上昇している。

くびれ部は、南北ともに周溝が掘り込まれているが、北側は特別意識的に深く掘り込んでくびれ部を強調している。

後円部南東部分から前方部北側にかけて、前方部前端、南側くびれ部には周溝が掘り込まれている。墳丘北側は、自然地形の斜面を大きくカットしている。

以上のことから、本古墳は南向きの斜面地に、墳丘北側を自然地形の大規模なカットと削り出しで、南側のほとんどを盛土によって築造されていると考えられる。



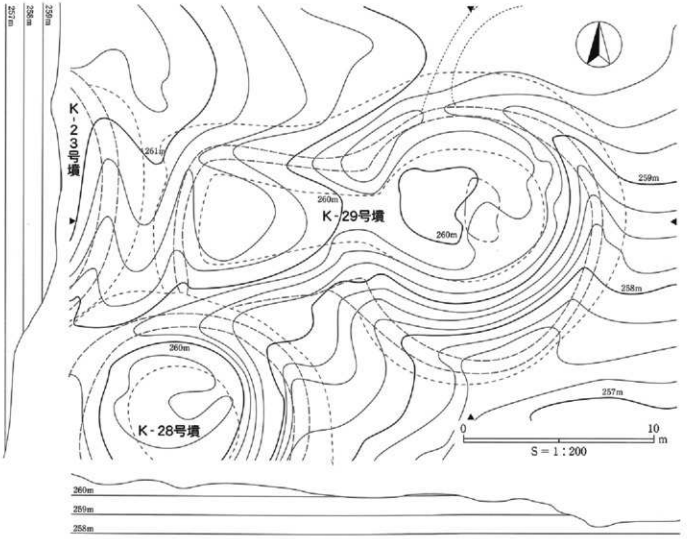
第12図　K-29号墳測量図①

K-29号墳

K-16号墳をはじめとする円墳群が立地している尾根が南東に向かって緩やかに下り、南北二本の尾根に分岐する。K-29号墳は北側に派生している尾根の稜線より僅かに南斜面に寄った所に、前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端には約2.2mの比高差が生じている。墳裾のレベルが最も低い後円部南側と墳頂平坦面の比高差は2.7mである。墳裾最低点は標高約258mである。前方部南側にK-28号墳が存在しこれに切られる。この他、西にK-23号墳が近接しており、西約60mにK-21号墳、東約42mにK-36号墳が存在している。

墳丘主軸はN-92°-Wを測る。前方部南コーナーに近接してK-28号墳が存在しており、これに伴う周溝によって前方部南コーナーは部分的に破壊されている。以下第12図に基づいて説明する。

後円部は、山側である北側面はあまり張らない。後円部南側は、南側に大きく膨らんでいる。これは後円部南墳裾が自然地形の影響を受けて低い所に位置していることに起因し



第13図　K-29号墳測量図②

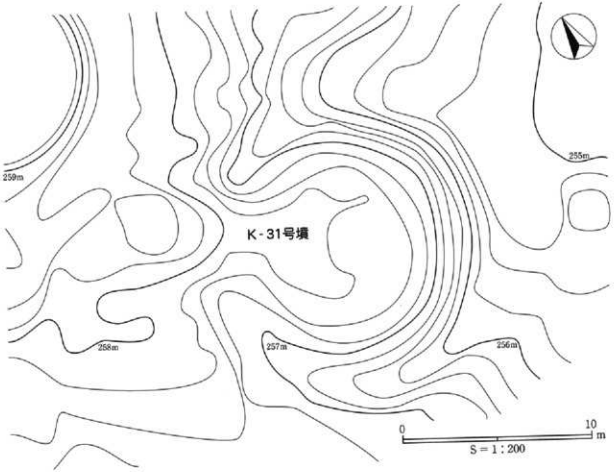
ている。側面の傾斜は北側は緩やかであるが、南側は急である。これは前方部に関しても同様である。後円部墳頂の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端には周溝が掘り込まれており、明確に認識できる。前方部両側辺は、前端に向かって直線的に緩やかに開く。後円部から連続してくる墳頂平坦面のレベルはくびれ部にかけて僅かに下がり、前方部前端に向かって緩やかに上昇している。これは前方部を山側においているためである。

くびれ部は、周溝を北側のくびれ部で深く掘削することによって強調している。一方の南側も墳裾から墳頂まで比高差があるため、くびれ具合は良好に等高線に反映されている。

前方部南側コーナーを除いては周溝が掘り込まれていることが確認できた。

以上のことから、本古墳は南向きの斜面地に、墳丘下部、墳丘北側を地山の削り出しによって、墳丘上部、墳丘南側を盛土によって築造されていると考えられる。



第14図　K-31号墳測量図①

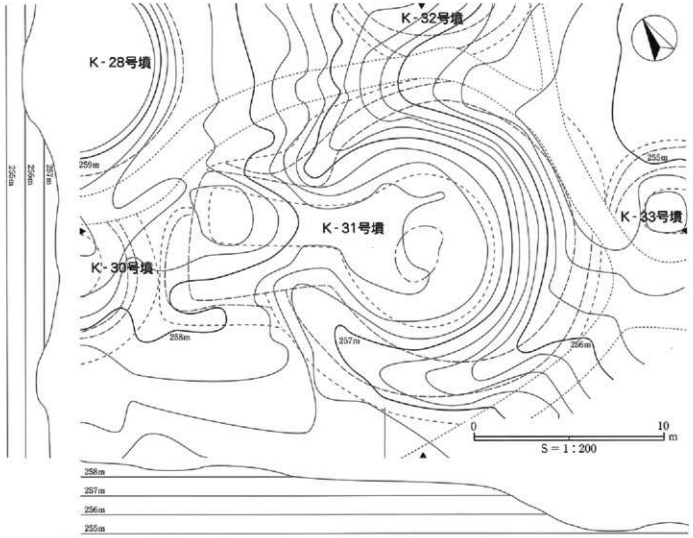
K-31号墳

K-16号墳をはじめとする円墳群が立地している尾根が南東に向かって緩やかに下り、平坦で幅の広い南北二本の尾根に分岐する。K-31号墳は南側に派生している尾根の付け根部分に前方部を急斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端では約3mの比高差を生じている。墳丘最低点は標高約256mである。前方部西側にK-30号墳が、後円部東側にK-33号墳、後円部北側にK-32号墳が近接しており、北約28mにK-29号墳、南約26mにK-55号墳が存在する。

墳丘主軸はN-59°-Wを測る。墳丘築造後の人為的改変は行われていないものと考えられる。以下第14図に基づいて説明する。

後円部は、西側においては墳裾と墳頂の比高差があまり無いため斜面が狭くなっているが、後円部東側は広い。この結果、後円部東側は大きく膨らんでいる。後円部墳頂中央付近の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端に墳裾と墳頂平坦面との比高差が0.3mほど有り前方部前端は明確に認識できる。前方部両側辺は前端に向かってほぼ直線的に緩やかに開いている。前方部側面



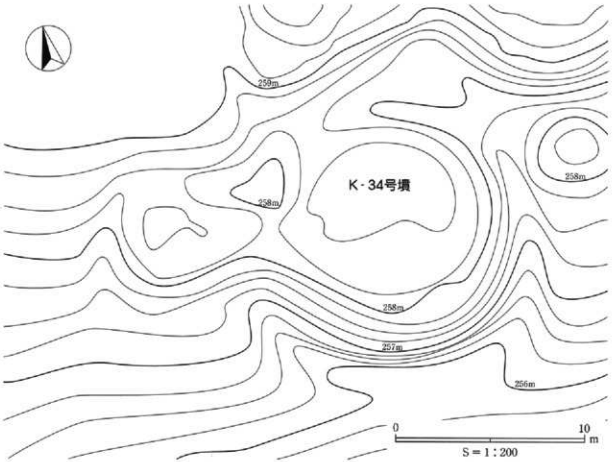
第15図　K-31号墳測量図②

は南側裾のレベルが北側より低いため南斜面が広くなっている。後円部から連続してくる墳頂平坦面のレベルは、くびれ部から前方部前端に向かって上昇している。

くびれ部は、墳丘を取り巻いている周溝がくびれ部付近で、急激にその深さを増すため明瞭である。墳裾から墳頂まで比高差があるため、くびれ部分は良好に等高線に反映されている。

墳丘の南北両側には周溝が掘り込まれており、周溝の掘削されていない部分も前方部前端北側を除いて自然地形と墳丘を区別するためのテラス面が存在している。後円部南北両側辺には、一見前方部の周溝とは別物のように見える周溝を、深く掘り込むことで自然地形と墳丘を明瞭に区分している。

以上のことから、本古墳は東向きの斜面地に、墳丘下部、墳丘西側を地山の削り出しによって、墳丘上部、墳丘東側を盛土によって築造されていると考えられる。本古墳の特徴として、後円部側辺に掘削された深い周溝の存在があげられる。



第16図　K-34号墳測量図①

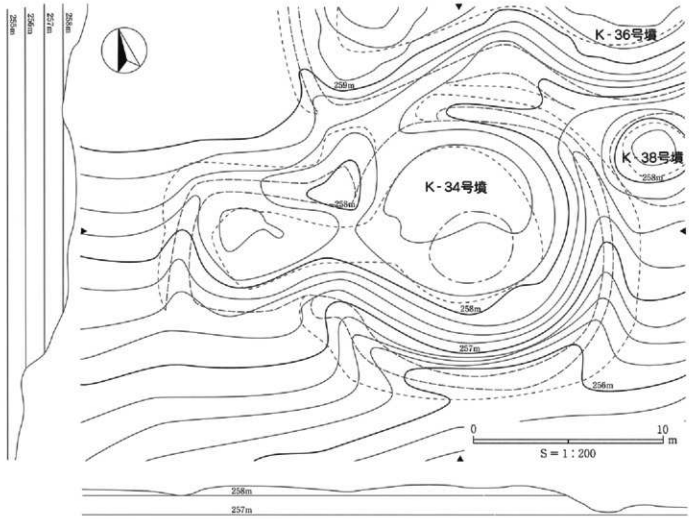
K－34号墳

K-16号墳をはじめとする円墳群が立地している尾根が南東に向かって緩やかに下り、南北二本の尾根に分岐する。K-29号墳周辺から北側に派生している尾根は東に向かって伸び、K-50号墳に至る。K-34号墳はこの尾根の緩やかな南斜面に等高線とほぼ平行に主軸をおいて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端との比高差は約0.6m程であるが、墳丘北側と南側では比高差を生じており、後円部では南側が北側より約2.3m低い。墳裾最低点は標高約256mである。

墳丘主軸はN-76°-Wを測る。墳丘築造後の人為的改変は受けていないものと考えられる。以下第16図に基づいて説明する。

後円部は、南側に大きく膨らんでいる。北側には周溝が途切れてブリッジ状施設が取り付いている。後円部の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端には墳裾と前方部墳頂平坦面との比高差が約0.75mあり前方部前端は明



第17図　K-34号墳測量図②

確に認識できる。両側辺は前端に向かって直線的に開いている。後円部から連続してくる墳頂平坦面のレベルは、くびれ部にかけて僅かに下がり、前方部前端に向かって緩やかに上昇している。

くびれ部は、墳丘を取り巻いている周溝が北側（山側）のくびれ部で意識的に深く掘削されているため強調されている。一方の南側も周溝がくびれ部に達しており、よくくびれている。

後円部北側のブリッジ部分、前方部南側辺を除いては周溝が掘り込まれている。

以上のことから、本古墳は南向きの斜面地に、墳丘下部、墳丘北側を地山の削り出しによって、墳丘上部、墳丘南側は盛土によって築造していると考えられる。

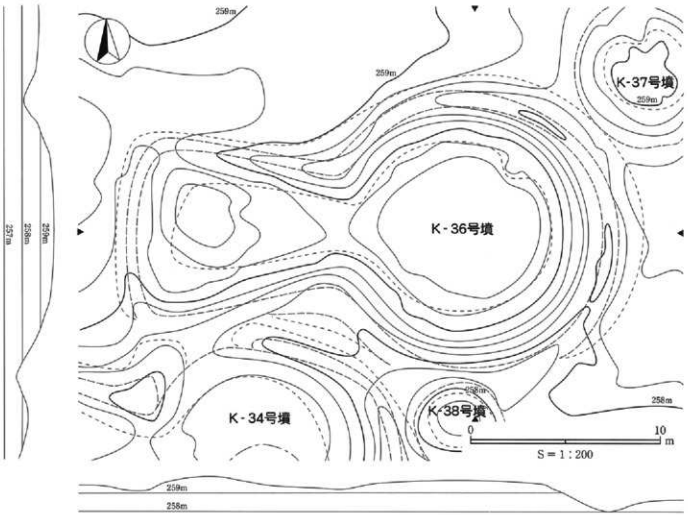
第18図　K-36号墳測量図①

K－36号墳　（1985年発掘調査）

K-36号墳は、小森山支群が展開する西から東へ延びる尾根が中途で二本の尾根を分けた北側尾根の稜線上に位置する。尾根はこの周辺ではほぼ水平に延びるが、このK-36号墳はその中でもやや高まりを持つ位置、この尾根の最高所を選んで築かれている。標高は後円部頂と前方部頂でほぼ等しく、およそ259.6mを測る。墳丘の主軸方位はN-88°-Wで、後円部が尾根の上方を向く。この付近での尾根は西南西から東南東へ延びており、主軸方位は尾根線の方位とは一致していない。

K-36号墳周辺の古墳は、後円部の東南、尾根の稜線から北に落ちたところにK-37号墳、後円部南側の緩斜面には裾を接するようにK-38号墳、前方部西側にはK-35号墳といずれも径10mにも満たない小墳がK-36号墳に従属するかのように築かれている。さらには傾斜の緩い尾根の南斜面を利用して継続的な古墳の築造が認められ、中にはK-34号墳のような前方後円墳も存在する。

また、このK-36号墳の造られた尾根の下方には、稜線上に3基の前方後円墳が存在し、ここでは稜線上の主たる前方後円墳と、周辺の小規模墳の関係を見て取ることができる。

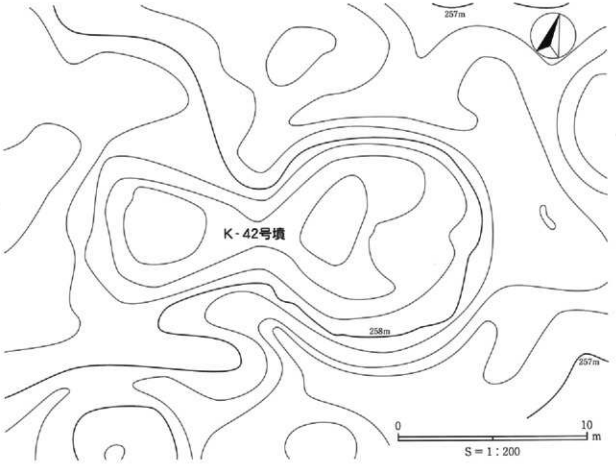


第19図　K-36号墳測量図②

下小松古墳群中でこのような状況は、この尾根において最も顕著である。

さて、K-36号墳の墳形については、1985年に行われた発掘調査によっておおよその情報がもたらされており、合わせて行われた測量調査の結果とともに見ていきたい。K-36号墳は発掘調査の結果、全長25.5m、後円部径15m、前方部前端幅9mの前方後円墳であることが判っている。溝の最深部からの高さは後円部で2m前方部では1.4mである。この古墳群における前方後円墳のプロポーションとしては、前方部が比較的大きく、K-7号墳に代表される短小の前方部を持つ一群とは明らかに異なる形態である。

墳丘の依存は極めて良く、ほぼ平坦な尾根の稜線上に位置することからも等高線は前方後円形に巡る。周溝はトレンチを設定した個所では全て確認され、また残りの場所においても等高線の状況から確認できる。唯一等高線が巡らない前方部北側コーナーも付近の調査結果から判断して溝は途切れずに存在すると思われる。なお、墳丘斜面の等高線間隔は一定で段築は見られない。



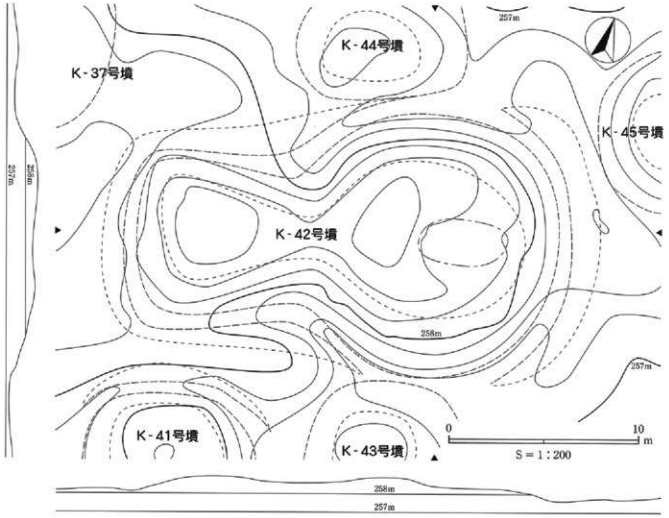
第20図　K-42号墳測量図①

K-42号墳（1988年発掘調査）

K-42号墳はK-36号墳が所在する小森山支群低位の北側尾根の稜線上に位置する。ほぼ水平に推移するこの付近の尾根にあって、K-42号墳の標高は後円部頂で257.6mを測り、西に30m程離れたK-36号墳墳頂より2m程低い。やはり上方（西側）に前方部を、下方（東側）に後円部を向けており、見かけ上の主軸方位はN-108°-Wでこの付近での稜線の方向にほぼ一致する。

周囲には前方部の北側にK-44号墳が、南側にK-43号墳、K-41号墳が隣接する。いずれも径10mにも満たない小墳である。現況を見る限りではK-44号墳はK-42号墳の周溝の立ちあがりを切って造られている。一方同じ稜線上の前方後円墳であるK-36号墳との間には明瞭な間隙があり、周囲の小墳の過密を考えると、意識的に距離を置いて築造されていることが想定される。

K-42号墳の古墳南半の周溝について、1988年に発掘調査が行われている。この所見では調査範囲においては全面で周溝の存在が確認された。この結果をもとにした墳丘各部の計測値は、全長22.3m、後円部径14.5m、前方部長8.5m、くびれ部幅6.9m、前方部

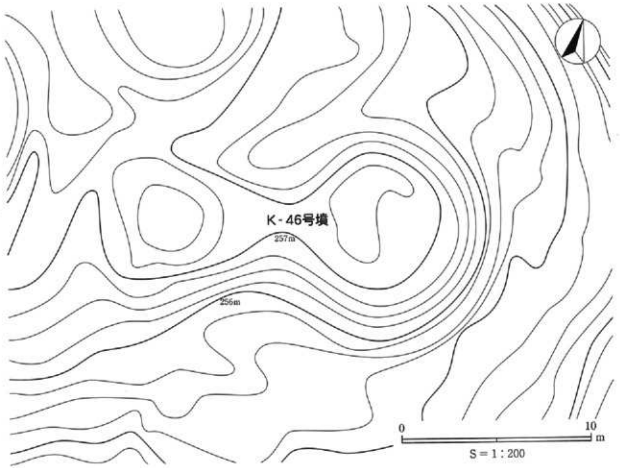


第21図　K-42号墳測量図②

前端幅8.8mである。K-36号墳と同様前方部が比較的大きく、全体のプロポーションもK-36号墳に近似する。墳形は後円部の北から西にかけてやや角張ったコーナーと直線的な部分が認められ、測量段階では前方後方墳の可能性も指摘できたが、南半の調査結果をみると周溝は円弧を描いており前方後円墳と考えるほうが適当である。

墳丘が稜線のやや南寄りに築造されていることから墳裾の標高は南側でより低い。周溝の底からの高さは後円部で2.1m、前方部で1.2mである。この比高差は後円部が尾根の下方に造られている事によっており、実際の標高では後円部頂より前方部頂のほうが0.2mほど高い。

墳丘斜面は後円部南側で膨らんでいる。前方部の南側ではそれ程でもなく、恐らく後円部は盛り土によって、前方部の大部分が地山を削り出して造られているのであろう。そのほかは端整で等高線も前方後円形にきれいに巡る。ただし、後円部頂の平坦面には主軸上で等高線の乱れがあり、埋葬主体の経年変化の影響が地表に及んでいるものと考えられる。



第22図　K-46号墳測量図①

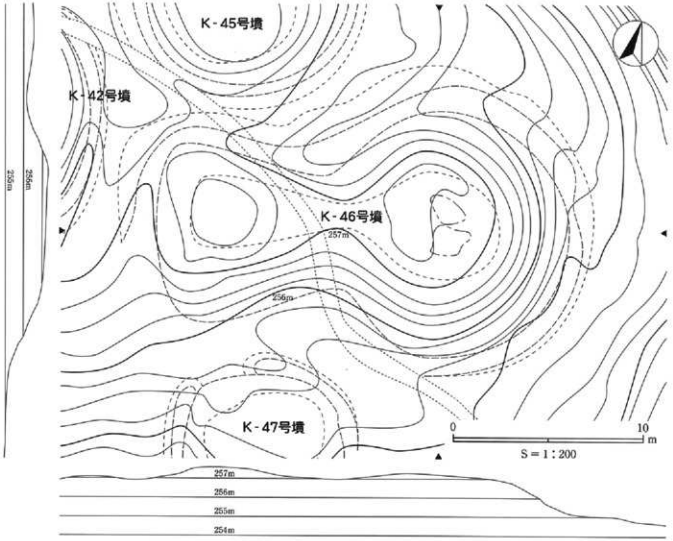
K-46号墳

K-29号墳付近から東方に伸びてきた尾根は、東部においてやや南に向かって折れ、K-50号墳に至る。K-46号墳は西から伸びてきた尾根が南に折れる直前の主尾根先端南側に前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端の比高差は約1.75m程である。最も墳裾レベルの高い前方部北コーナー付近と、最も墳裾レベルの低い後円部南東の比高差は約2.0mである。墳裾最低点は標高約256mである。南側斜面にK-47号墳、北側平坦面にK-45号墳が近接しており、西約26mにK-42号墳、南東約42mにK-50号墳が存在している。

墳丘主軸はN-106°-Wを測る。墳丘築造後の人為的改変は行われていないものと考えられる。以下第22図に基づいて説明する。

後円部は、南側に膨らんでいるが、全体的には整った円形を呈している。後円部東の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端墳裾と墳頂平坦面との比高差が約0.7mあり、前方部前端は明確に認識



第23図　K-46号墳測量図②

できる。前方部側面の斜面は北側は狭いが、南側は広い。これは両者の墳裾から墳頂の比高差の違いに起因しているものである。前方部両側辺は前端に向かってほぼ直線的開いている。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルはくびれ部にかけて僅かに下がり、前方部前端に向かって緩やかに上昇している。

くびれ部は、南北両側とも良くくびれており、その状況は等高線に良く反映されている。

周溝は、古墳の全周に掘り込まれている。

以上のことから、本古墳は南東向きの斜面地に、墳丘下部を地山の削り出しによって、上部を盛土によって築造していると考えられる。

K－50号墳

K-29号墳付近から東方に伸びてきた尾根は、東部K-46号墳付近において標高を減じながら南に向かって折れる。この尾根が急傾斜をもって平野に落ち始めるその先端部分のやや東側に寄った所に、前方部を平坦面上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、墳裾のレベルが最も高い前方部北側コーナーと最も低い後円部南東との比高差は約3mにも及ぶ。墳裾最低点は標高約253mである。前方部北コーナーに接してK-46号墳が近接しており、北西約50mにK-46号墳が存在している。

墳丘主軸はN-120°-Wを測る。墳丘築造後の人為的改変は行われていないものと考えられる。以下第24図に基づいて説明する。

後円部北側は概ね正円を描いているが、南側は僅かに南東に膨らんでいる。後円部中央付近の等高線の乱れは埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

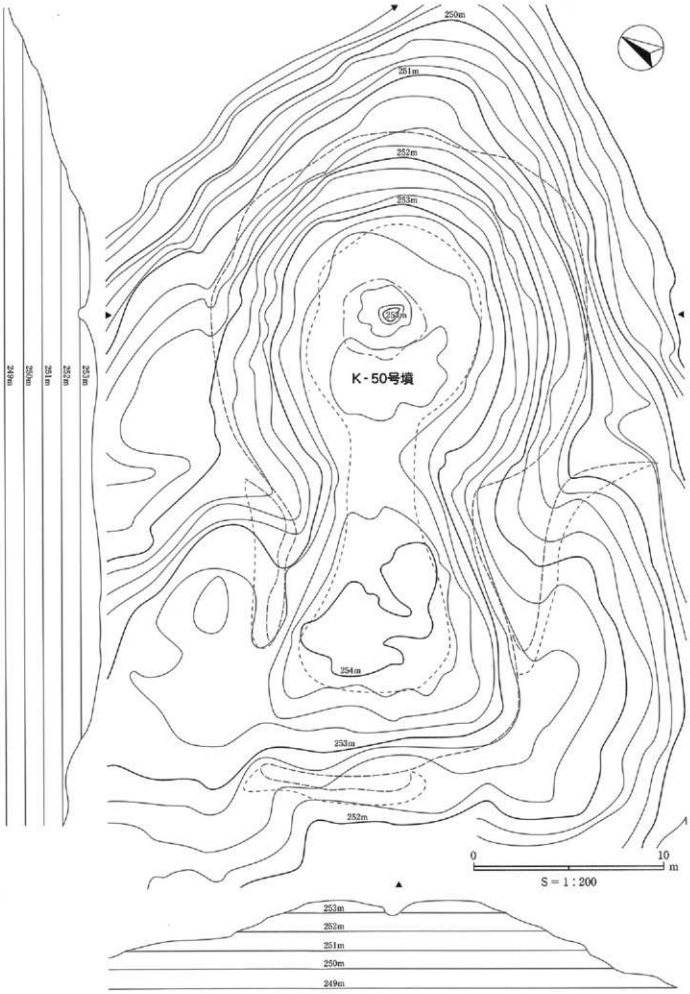
前方部は、前端墳裾と墳頂平坦面との比高差が約1.5mあり、前方部前端は明確に認識できる。前方部両側辺は前端に向かってほぼ直線的に緩やかに開いている。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルはくびれ部にかけ緩やかに上昇している。

くびれ部は、等高線に表れているように比較的良くくびれている。

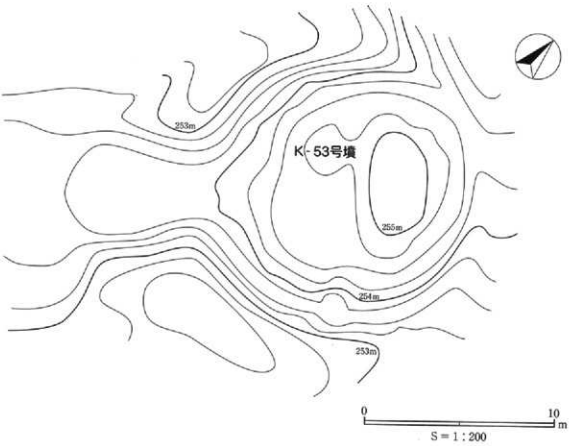
墳丘南北両方の前方部からくびれ部にかけては周溝が掘り込まれている。これとは別に前方部前端北半部にはこの部分だけ独立した深さ約0.3mの周溝が掘削されている。これに連続する形で後円部には幅の広いテラス面が全周している。

以上のことから、本古墳は墳丘下部を地山の削り出しによって、墳丘上部を盛土によって築造されていると考えられる。本古墳の特徴として前方部前端北側に意識的に深く掘り込まれた周溝をあげることが出来る。

第24図　K-50号墳測量図①



第25図　K-50号墳墳丘模式図②



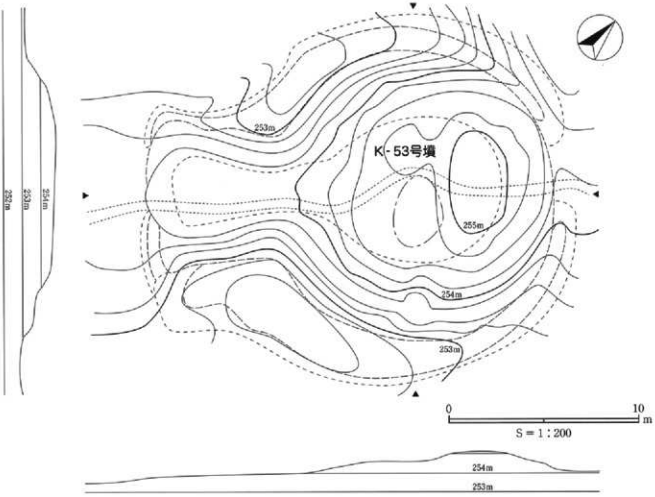
第26図　K－53号墳測量図①

K－53号墳

K－16号墳をはじめとする円墳群が立地している尾根が南東に向かって緩やかに下り、南北二本の尾根に分岐する。この分岐点の南西標高約255ｍ付近から短小な尾根が一筋派生している。K－53号墳はこのほとんど標高差を持たない尾根に前方部を斜面の下に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端にほとんど比高差がない。墳丘裾東西の比高差もほとんど無い。墳裾最低点は標高約254ｍである。前方部前端にはK－52号墳が近接しており、北約52ｍにK－21号墳、北東約62ｍにK－31号墳が存在している。

墳丘主軸はN－133°－Wを測る。墳丘上を小道が走っているが、大きな改変は行われていないものと考えられる。以下第26図に基づいて説明する。

後円部は、墳丘の左右がほぼ対称となっている。後円部後端から精美な円形を描いてくびれ部に至る。後円部後端にはブリッジ状の高まりが観察できる。後円部中央付近の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。



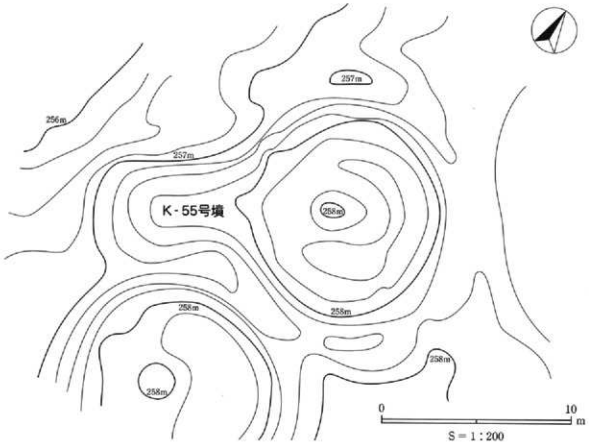
第27図　K－53号墳測量図②

前方部は、前端墳裾と墳頂の比高差が約0.7ｍあり、前方部前端は明瞭に認識できる。前方部側辺は、直線的に前端に向かって緩やかに開いている。 後円部から連続してくる墳頂平坦面のレベルはくびれ部に向かって緩やかに下降しているが、前方部墳頂平坦面は概ね水平である。これは後円部が山側に立地していることに起因するものであり、下小松古墳群内においては特異な現象といえる。

くびれ部は、比較的良くくびれている。下小松古墳群における他の前方後円墳と異なり、くびれの状況はほとんど左右対称といって良い。これはK－53号墳がある程度幅を持った尾根の稜線上に立地していることに起因している。

後円部後端のブリッジ部分と前方部前端を除いては周溝が掘り込まれていた。

以上のことから、本古墳はほとんど比高差の無い尾根上に墳丘下部を地山の削り出しによって、墳丘上部を盛土によって築造されていると考えられる。



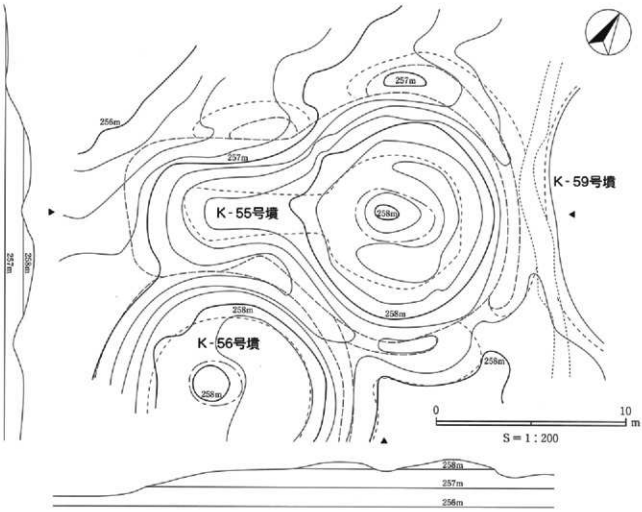
第28図　K－55号墳測量図①

K－55号

K－16号墳をはじめとする円墳群が立地している尾根が南東に向かって緩やかに下り、南北二本の尾根に分岐する。僅かな鞍部を挟んで南東に伸びる尾根は平坦面の幅が広く、古墳が密集している。K－55号墳は、この尾根縁辺の西端に前方部を斜面の下に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端に約0.9mの比高差を生じており、前方部墳頂平坦面と、後円部後端墳裾のレベルがほぼ同じになっている。墳裾最低点は標高約257mである。前方部南側にK－56号墳が近接し、これに切られ、北約28mにK－31号墳、東約40mにK－61号墳、南東約40mにK－68号墳が存在している。

墳丘主軸はN－122°－Wを測る。前方部東側にはK－56号墳が近接しており、これに一部切られている。以下第28図に基づいて説明する。

後円部は、北西側がやや膨らんでいるが、概ね円形を描いている。後円部東側と西側にブリッジ状の高まりが存在している。後円部中央付近の等高線が馬蹄形状に乱れているのは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。



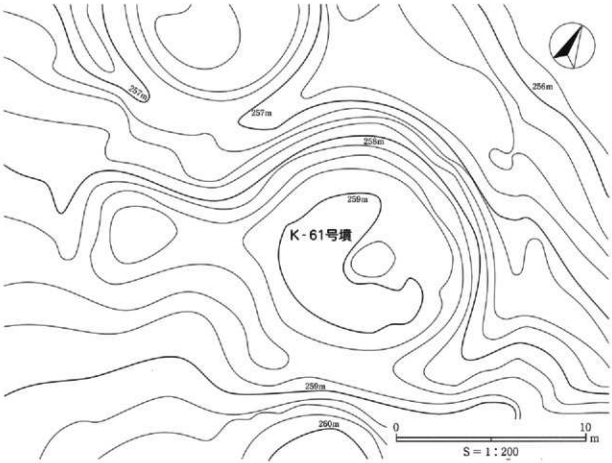
第29図　K-55号墳測量図②

前方部は、前端墳裾と墳頂平坦面との比高差が約2.2mあり、前端を明確に認識できる。両側辺は前端に向かって直線的に僅かに開く。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルは鞍部に向かって緩やかに下降しているが、前方部墳頂平坦面は概ね水平である。

くびれ部は、周溝を掘削することによって強調しているが実際にはあまりくびれていない。

周溝は、後円部においてはブリッジを除いた部分に、前方部においては北西側に掘り込まれていた。

以上のことから、本古墳は南西向きの斜面地に、後円部を地山の削り出しと盛土によって、前方部を盛土によって築造されたと考えられる。



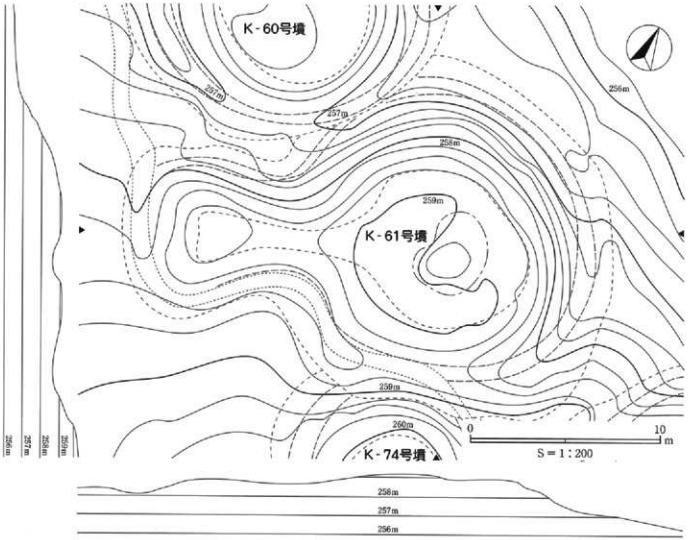
第30図　K-61号墳測量図①

K-61号墳

K-16号墳をはじめとする円墳群が立地している尾根が南東に向かって緩やかに下り、南北二本の尾根に分岐する。僅かな鞍部を挟んで南東に伸びる尾根は平坦面の幅が広く、古墳が密集している。K-61号墳は、この尾根北側縁辺に、墳丘主軸が自然地形の等高線に斜位に交わるように、また、前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端に約1.0mの比高差を生じている。墳裾のレベルが最も低い後円部北側と墳頂平坦面の比高差は約2.0mである。墳裾最低点は標高約257mである。前方部北側にK-60号墳が近接しており、これに切られている。後円部南側にはK-74号墳が近接しており、これを切っている。西約40mにK-55号墳、東約20mにK-75号墳、南約22mにK-68号墳が存在している。

墳丘主軸はN-118°-Wを測る。以下第30図に基づいて説明する。

後円部は、墳裾が南に張らないのは本古墳に先行して築造されていたK-74号墳の墳丘に制約されたものと考えられ、後円部北側が膨らんでいるのは谷側の急斜面に位置してい



第31図　K-61号墳測量図②

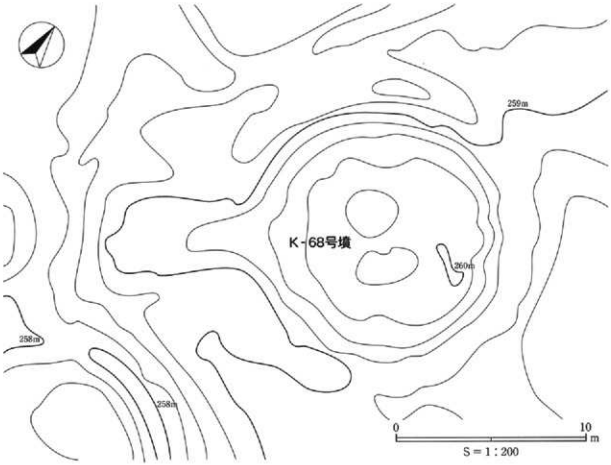
るからである。後円部中央付近の等高線が馬蹄形状乱れているのは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端墳裾と墳頂平坦面との比高差が約0.8mで、前端は明確に認識できる。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルはくびれ部にかけて僅かに下がり、前方部前端に向かって緩やかに上昇している。

くびれ部は、南北両方とも良くくびれており、その状況は等高線に良く反映されている。

周溝は谷側をはじめ墳丘を全周している。

以上のことから、本古墳は北向きの斜面地に、墳丘北側を盛土によって、南側を地山の削り出しと盛土によって築造されたと考えられる。本古墳の特徴として、谷側を含めて周溝が完全に全周していることが上げられる。



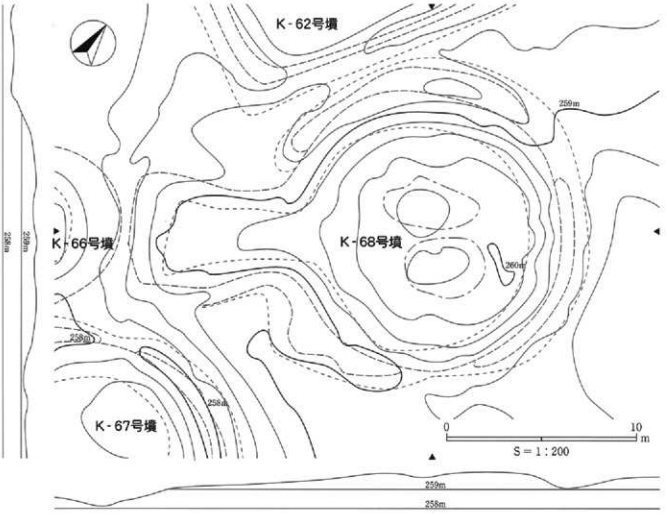
第32図　K-68号墳測量図①

K－68号墳（1993年発掘調査）

K-68号墳は、小森山支群が標高を下げながら二本の尾根に分かれるうち、南側の台地状をなす平坦な尾根の中央に位置する。標高は後円部頂で260.0mを測り、この尾根の最高点を示す。周辺の自然地形は後円部東側から前方部側に向けて緩く標高を下げており、古墳の築造地の選定や主軸方位の決定には、築造労力の省力化が大きく影響していると思われる。主軸方位はN-126°-Wである。

この台地状尾根は頂部の緩傾斜面が広く、下小松古墳群全域を見渡しても、最も古墳を築造しやすい場所のひとつといえ、ここには30基ほどの古墳が密集して築かれている。中央に位置するK-68号墳の周囲にはこれと切り合うことなく円墳や方墳が位置する。さらにこれらを取り巻くようにK-55・K-61などの前方後円墳を含む一群があり、地形に応じてその外側でも古墳の築造が行われている。このような古墳の立地を考慮すれば、K-68号墳はこの一群で最初に築造された古墳と判断ができる。

K-68号墳の墳丘は、1993年と1994年に行われた発掘調査によって概要を知ることができる。測量図の検討と合わせ見ていきたい。K-68号墳は全長21.9m、後円部径14.0m、くびれ部幅3.3m、前方部前端幅5mを測る前方後円墳である。墳丘の高さは、後円部西側の周溝底と後円部頂の比高差が1.8m、前方部前面の周溝底と前方部頂の比高差が



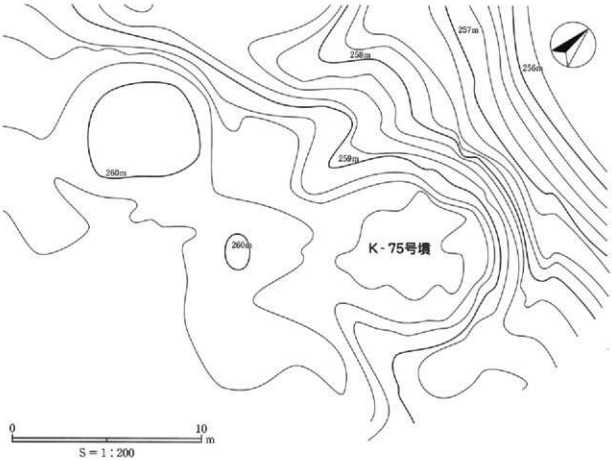
第33図　K-68号墳測量図②

1.2mであり、後円部は前方部より0.8m高い※1。全般的に低平であるが、発掘調査の結果では、墳丘の大部分は地山の削り出しによって整形されており、盛り土は後円部の東南で0.1m足らずである。後円部は頂部の平坦面が比較的広く、測量調査段階で中央には主軸を挟み2個所の地表面の落ち込みが観察できており、発掘調査によってこれらは埋葬主体部の腐朽に伴う落ち込みであると確認された。前方部は一見するといわゆる撥形に開く前期古墳の平面形態をとるが、古墳の築造年代を決定する材料は主体部の発掘調査を終えた現在でも乏しく、判断は他の古墳の状況との比較に頼らざるを得ない。

古墳を取り巻く周溝は全周しない。幅1～2m、深さ0.4m程度で後円部を巡るものの前方部は南側のみ確認されている。

K-68号墳は立地から見て、周囲の古墳に先立って築造された前方後円墳として重要な意味を持つが、古墳の規模や築造方法に際立った優位性を認めることはできない。しかし、このことが下小松古墳群における前方後円墳のあり方を示しており、興味深い。

※1　報告書（『下小松古墳群(1)』1995川西町教育委員会）では後円部高さ約0.4m、前方部高さ0.2m、後円部と前方部の比高差約0.7mとなっているが、報告書作成時の誤りであり、ここで訂正する。



第34図　K-75号墳測量図①

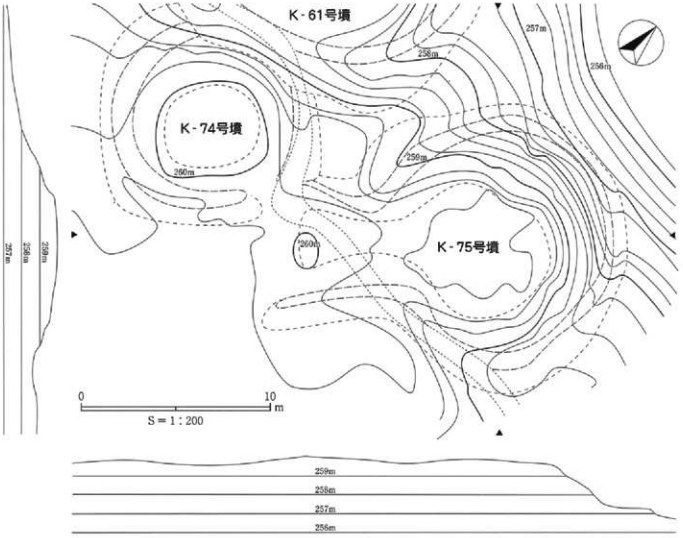
K－75号墳

K-75号墳は、K-55号墳付近から広い平坦面をもって、南東方向に伸びている尾根北側縁辺に、墳丘主軸が自然地形の等高線に斜位に交わるような形で、前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端と後円部後端に約2.3mの比高差を生じている。墳丘最低点の後円部北裾と墳丘最高点の前方部墳頂との比高差は約2.8mである。

墳裾最低点は標高約258mである。前方部西側にK-74号墳が近接し、これに切られ、西約22mにK-61号墳、東約26mにK-77号墳、南西約38mにK-68号墳が存在している。

墳丘主軸はN-134°-Wを測る。前方部西側にはK-74号墳が近接しており、これに一部切られている。墳丘斜面の数箇所に攪乱が存在している。以下第34図に基づいて説明する。

後円部は、北西側が大きく膨らんでいる。これは後円部北西墳裾が平坦面から落ちた急斜面に位置していることに起因している。後円部中央付近において、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没は確認できなかった。



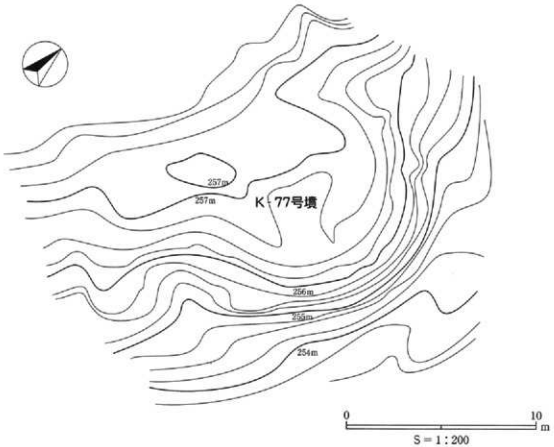
第35図　K-75号墳測量図②

前方部は、測量図からも分かるように、等高線のみではその形をはっきりと読み取ることは困難である。墳裾と墳頂の比高差が約0.4mあり、これによって前方部前端を認識できる。前方部西側コーナーは近接するK-74号墳とブリッジ状につながっており、不明瞭になっている。このブリッジ状施設が古墳築造時から存在したかどうかは不明である。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルはくびれ部にかけて僅かに下がり、前方部前端に向かって緩やかに上昇し、墳丘最高点は前方部墳頂に存在している。

くびれ部は、墳裾から墳頂までの比高差がほとんど無く、等高線のみではその形を読み取ることは困難であるが、自然地形から墳丘を分離している周溝が東西両くびれ部に存在しており強調されている。

周溝は前方部前端を除いて掘り込まれている。

以上のことから、本古墳は北向きの斜面地に、墳丘下部を地山の削り出しによって、墳丘上部特に後円部北西側を盛土によって築造されたと考えられる。



第36図　K-77号墳測量図①

K-77号墳

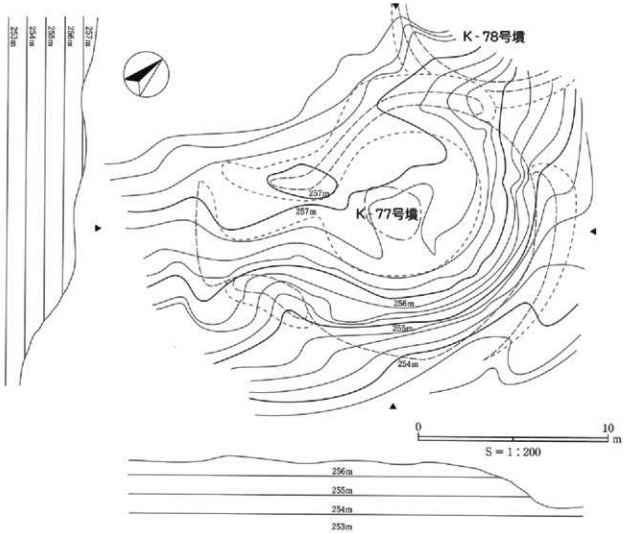
K-77号墳は、K-55号墳付近から広い平坦面をもって、南東方向に伸びている尾根の西側先端の尾根上平坦面より若干東斜面に落ちた所に、前方部を高い南側に向けて立地している。

墳裾最低点は標高約254mである。後円部北西にはK-78号墳が近接して、これを切っており、前方部西側にはK-76号墳が近接して、これに切られている。西約26mにK-75号墳が存在している。

墳丘主軸はN-136°-Wを測る。古墳は測量図からも分かるように、等高線のみでは前方後円墳としての形をはっきりと読み取ることは困難である。墳丘築造後の人為的改変は受けていないものと考えられるが、墳丘東側は封土が自然流出している可能性がある。以下第36図に基づいて説明する。

後円部は、東側は大きく膨らんでいる。後円部の等高線の乱れは、埋葬主体部の腐朽に伴う陥没によって引き起こされたものである。

前方部は、前端墳裾と墳頂平坦面との比高差が約0.2m程度で、前端はあまり明瞭には



第37図　K-77号墳測量図②

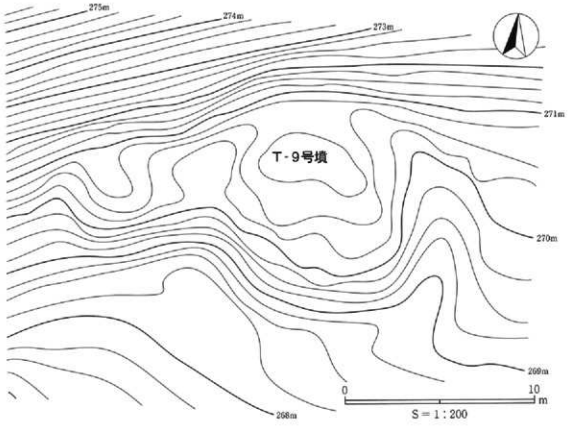
認識できない。前方部両側辺は緩やかに開いている。前方部北コーナーは、明瞭でなく墳丘裾部から緩やかなスロープが墳頂に至っている。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルは前方部前端に向かって緩やかに上昇している。

くびれ部は、東西両方とも該当部分を深くした周溝によって強調しているが、実際にはあまりくびれていない。

周溝は、前方部西側コーナー付近、後円部北側の一部分を除いて掘り込まれている。

墳丘の裾は、墳丘の西側と東側で比高差を生じており、後円部では東側が西側より約2.3m低い。

以上のことから、本古墳は東向き斜面地に、墳丘西側を地山の削り出しによって、東側を地山の削り出しと盛土によって築造されたと考えられる。しかし、実際には地山の削り出しが他の古墳に比して浅く、山側は全体的にフラットな印象を受ける。



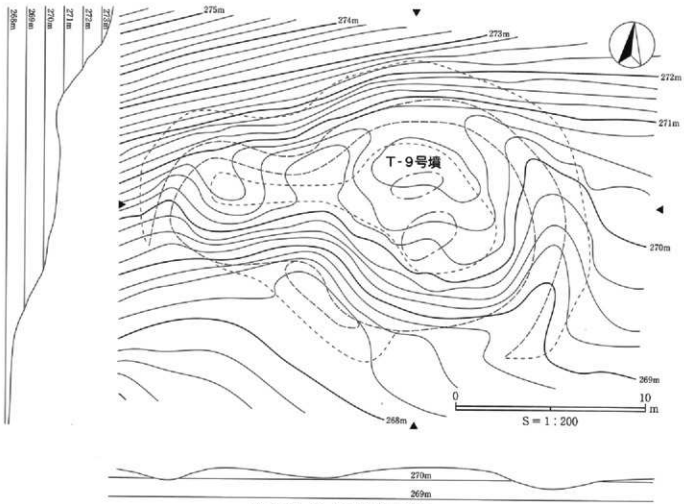
第38図　T－9号墳測量図①

T－9号墳　（1997年発掘調査）

丘陵の主稜線から蛇行しながら東へ派生する痩せ尾根の稜線上には鷹待場支群を形成する古墳が列状に分布する。この中にあって、T－1号墳を中心にやや面的な広がりをもって古墳が分布する個所の南斜面にT－9号墳は位置する。この位置は傾斜のきつい斜面にあって自然地形が部分的に緩傾斜になるテラス状の地形であるが、古墳、なかでも前方後円墳の立地としては極めて違和感が残る場所である。

周囲を見回せば、稜線上には数基の円墳や方墳が場合によっては互いを切り合いながら、中には山寄せとなりながらも築かれており、鷹待場支群の中では最も集中して古墳が築かれている。直上の稜線の標高が280mあるのに対し、T－9号墳の後円部頂の標高は271m弱である。墳丘主軸の方位はN－97°－Wであり、前方部を西に向けている。

測量図を観察すると、標高270m付近では墳丘外の斜面を形成する等高線が突如膨らみを持って、そのまま墳丘を形づくっていることが読み取れる。このとき、古墳上方の斜面と墳丘の変換点は判断が困難である。つまり、墳丘の北側面は現況ではほとんど認識できず、墳丘の外と墳頂の平坦面が直に接している状況である。しかし、ここを発掘調査によって確認した結果は、墳丘の北側には明確な溝が掘り込まれており、北側面を削り出しながら、自然地形と墳丘を切り離す努力が行われていたことを示していた。これは前方部前端、後円部後端においても同様である。

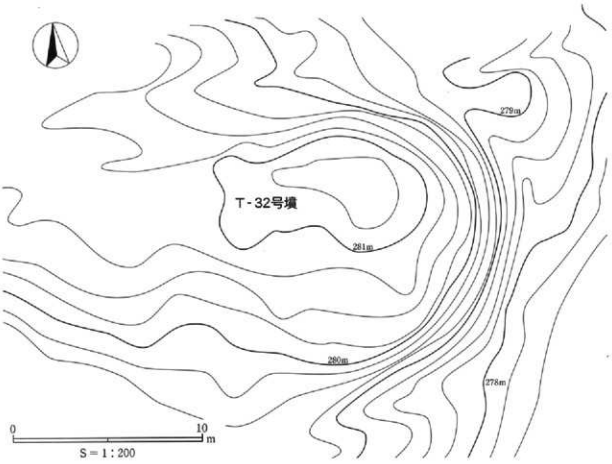


第39図　T-9号墳測量図②

発掘調査は1997年に実施された。これによって古墳の規模と形状が全長19.6m、後円部径11.8mの前方後円墳であると確認された。墳丘の高さは古墳が斜面に造られていることから有効な数字を持たないが、測量図から墳丘南側面の裾レベルと墳頂レベルを読み取ると2mを超える見かけの高さがある。墳丘全体のプロポーションは築造以降の変化が大きいことが予想され詳細は不明であるが、前方部は決して大きくなく、小森山支群の前方後円墳と共通する特徴と見られる。

後円部の頂には、平坦面のやや南寄りで地表面の落ち込みが観察された。発掘調査によってこれも他の古墳と同様に埋葬主体部の腐朽に伴う落ち込みであることが確認されている。この埋葬主体部の位置は平坦面の中央を外れているが、墳丘の裾から主軸を割り出した場合、ほぼ主軸上にあることがわかる。これはやはり斜面に造られたY-48号墳にも見られた特徴である。

古墳をとりまく断面U字形の溝である周溝については、先述したほか、墳丘の南側でも発掘調査によって確認されている。ところで、このような斜面に築かれた古墳の場合、周溝は古墳の形態を削り出した結果の所産であることが明確になる。その場合明確な目的を持って造られる外表施設としての周溝との区別が必要となるのではないだろうか。言葉の定義を含め検討が必要であろう。



第40図　T-32号墳測量図①

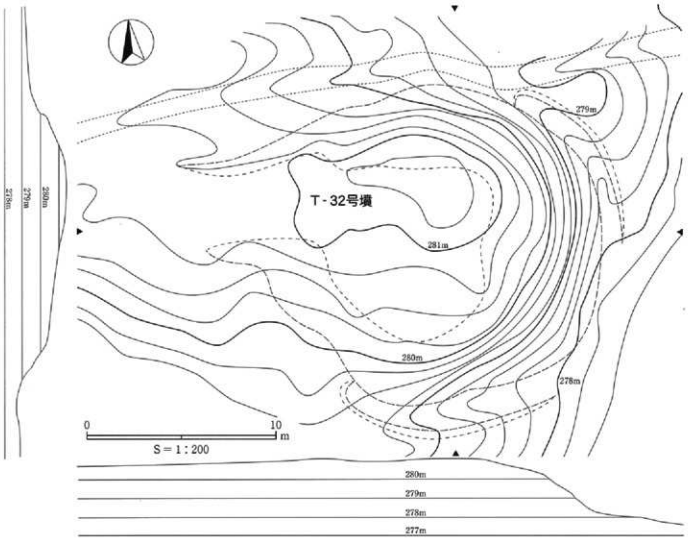
T-32号墳

T-33号墳から東に伸びる尾根は、一度標高を減じて鞍部を挟んでT-1号墳の立地している尾根に続く。T-32号墳は、T-33号墳からはじまった尾根が、標高を減じる斜面に、前方部を斜面の上に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端付近と後円部後端とに約2.9mの比高差を生じている。墳裾最低点は標高約298mである。南西約190mにT-37号墳、東約120mにT-9号墳が存在している。

墳丘主軸はN-84°-Wを測る。古墳は測量図からも分かるように、等高線のみでは前方後円墳としての形をはっきり読み取ることは困難である。墳丘築造後の人為的改変は受けていないものと考えられる。以下第40図に基づいて説明する。

後円部は、測量図からも分かるように、東側は円形を描いているが、西側は円形を呈さない。後円部墳頂平坦面には埋葬主体部の腐朽に伴う陥没は確認されなかった。

前方部は、前端部分においては自然地形との境界は明瞭でない。南北両側面には墳裾と墳頂平坦面との間に僅かな比高差を持っている。このことから、不整形ではあるが、明ら



第41図　T-32号墳測量図②

かに前方後円形を意識して築造していることがうかがえる。前方部側辺は前端に向かってやや開いている。後円部から連続している墳頂平坦面主軸上のレベルはくびれ部に向かって緩やかに下降し、前方部ではほぼ水平で、そのまま明瞭な段差などをもたずに自然地形へと移行していく。

くびれ部は、南側は僅かにくびれているが、北側はほとんどくびれていない。

周溝は後円部の一部分に掘り込まれており、後円部東側の墳裾付近ではテラス面が存在している。

以上のことから、本古墳は東向きの斜面地に、後円部を地山の削り出しと盛土によって、前方部を地山の削り出しによって築造されたと考えらえる。

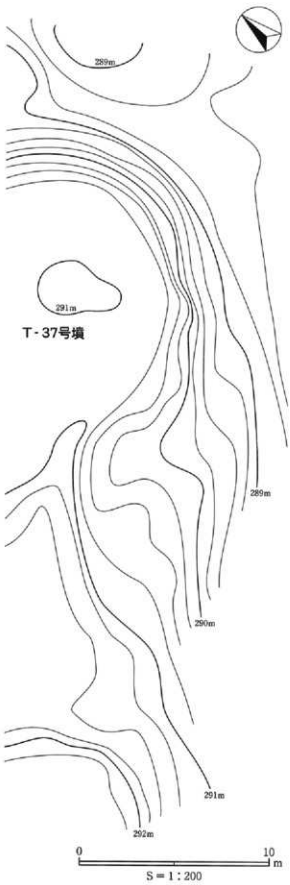
T－37号墳

T－39号墳付近から北東方向に向かって尾根が緩やかに下がりながら伸びている。T－37号墳は、この尾根の稜線上に、前方部を斜面上側の南東に向けて立地している。そのため墳丘の裾は、前方部前端付近と後円部とに約2.5mの比高差を生じている。墳裾最低点は標高約289mである。北東約190mにT－32号墳が立地している。なお、本古墳は川西町と飯豊町との境に位置しており、今回の測量調査では川西町側のみ測量を行った。

墳丘主軸は不明である。今回測量した、東半分のみの測量図からは、前方後円墳としての形を読み取ることは困難である。後円部南側において等高線が方形を呈しているがこれは墳丘裾をめぐる小道によって削平を受けたためであると考えられる。飯豊町側の後円部は一部削り取られている。以下第42図に基づいて説明する。

後円部は、墳裾と墳頂との比高差が約2.0mあり明確に認識できる。南側において等高線が、墳丘裾をめぐる小道によって方形を呈しているが、東側は整った円形を描いている。墳頂平坦面はかなり広い。中央部分の小さな高まりは後世のものと考えられる。

前方部は、前端部分においては、周溝が掘り込まれていたり、自然地形と前方部前端に比高差が存在しないことから墳丘と自然地形との境界は明瞭で



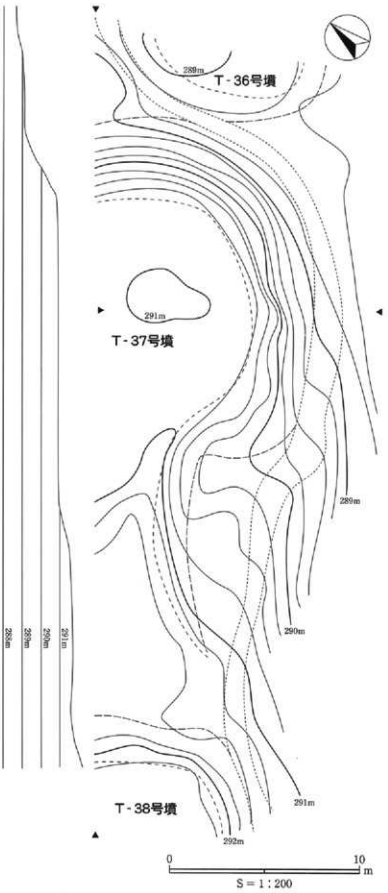
第42図　T－37号墳測量図①

ない。前方部側面は自然地形とは明らかに区分できる比高差を有しており、この範囲を前方部として認識できる。前方部側辺は前方部前端に向かってシャープに開いている。現状を観察する限りでは、飯豊町側もほとんど同様の状態を示しているといえる。後円部から連続している墳頂平坦面のレベルは、前方部前端に向かって緩やかに上昇している。

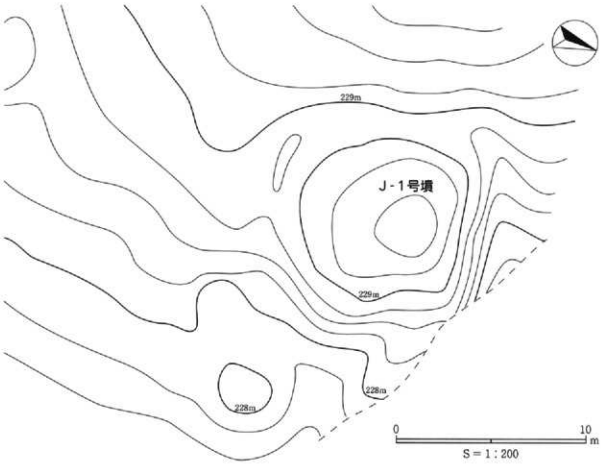
くびれ部は、良くくびれており、その状況は良好に等高線に反映されている。このことは、飯豊町側でもほとんど同じ状況であった。

本古墳に付随する周溝及びテラス面は確認できなかった。

以上のことから、本古墳は緩やかな北東向き斜面地に、墳丘下部と前方部を地山の削り出しによって、墳丘上部を盛土によって築造されたと考えられる。



第43図　T-37号墳測量図②



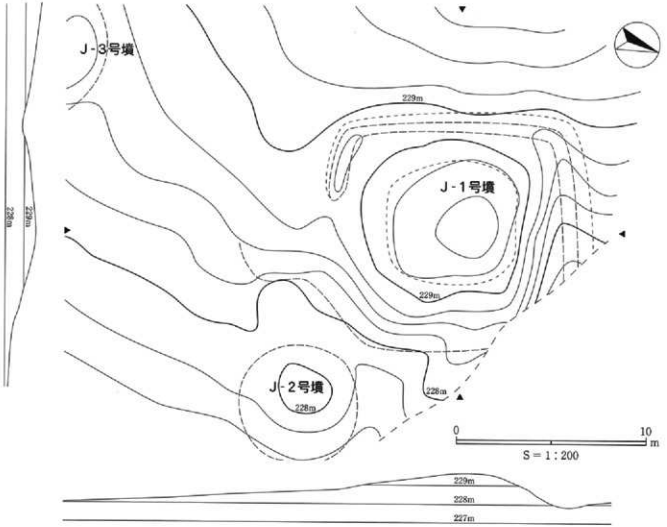
第44図　J-1号墳測量図①

J-1号墳（2000年発掘調査）

下小松古墳群の展開する丘陵主脈が徐々に標高を減じながら北に延び、標高275.9mの単点から北に膨らみながら東へと延びる尾根を分ける。この尾根は平野に落ち込む直前で二本の舌状の小尾根に分かれているが、この二本のうち南側尾根の先端に陣が峰支群がある。この尾根は全般に傾斜が緩く、幅も広い。J-1号墳はこの尾根に直交するように築かれている。墳頂の標高は、229.5m、主軸方位はN-161°-Eである。

周囲にはすぐ東にJ-2号墳、前方部の南15mほどのところにJ-3号墳があり、この3基で陣が峰支群は形成されている。

2000年に遺構の性格確認のための調査が行われ、規模と形状が確認されている。J-1号墳は、全長17.8m、後方部幅12.4mの前方後方墳である。墳丘の高さは後方部北側の周溝底から後方部頂で2.8mを測る。墳丘は測量図では方形マウンドの存在を指摘できるだけで、前方部の存在は下草のない状態でようやく視認できる程度であった。発掘調査により、くびれ部と前方部前端の溝が確認され、前方後方墳との判断に至った。なお、前方部では盛土を確認することはできていない。古墳のプロポーションとしては、前方部が非常に小さく、また形状も歪んでいる。後方部はやや東西に長い。発掘により確認された墳丘の裾の位置から、西側では直線的な裾とほぼ直角に曲がるコーナーが想定される。一方、



第45図　J-1号墳測量図②

北東コーナーではやや鋭角になり、南東コーナーではやや鈍角になるようである。

周溝は後方部を囲むように周るが、東西の両くびれ部で途切れるようである。とりわけ、西側のくびれ部では、周溝が前方部側にくびれた所でやや外に向かって広がりながら収束しており、墳丘の西側と北側では墳丘と対峙する側の立ち上りが明確であるが、東南のコーナー付近では不明瞭になる。また、前方部前端には狭く浅い溝が掘られて墳丘と自然地形が切り離されている。

後方部の頂では、他の前方後円墳で見られたような地表面の落ち込みは観察されていない。埋葬主体部の確認の結果、この古墳では、他の前方後円墳の埋葬主体部にみられたような大規模な墓壙を持つものと異なり、墳丘の構築過程で棺を安置する主体部であることが判明している。

J-1号墳は、出土した土器から古墳時代前期に遡ることが確認されている。この古墳の未発達な前方部の形態は、小森山支群の前方後円墳に見られた短い前方部とも異なる。確実な唯一の前方後方墳であることや立地の違いも考慮すれば、J-1号墳は下小松古墳群の中で他の古墳と性格を大きく異にするものといえる。

第3章　下小松古墳群における造墓活動の展開

第1節　はじめに

この章で述べることは、眺山丘陵全域にわたって実施した測量調査と、下小松古墳群のすべての前方後円墳・前方後方墳を対象とした測量調査から得られた知見に基づいている。

下小松古墳群において発掘調査を経て具体的な構造の判明している古墳は、まだ全体の1割にも満たない。多くの古墳がまだ未調査である。分布調査の目的のひとつはこの欠を補うことにあったが、この過程において、古墳の立地や古墳間の切り合い関係によって、古墳間の時間的新古をしめす要素を抽出しうる見通しを得た。古墳の立地は、おもに古墳時代の前期・中期・後期に対応する比較的巨視的な時間差をしめし、古墳間の切り合い関係は同一支群内における個々の古墳間の築造順序を示すものである。さらに、古墳間の切り合い関係と微細微地形を関連させることによって、支群内における古墳築造の展開の仕方に一定の傾向があることを突き止め得た。また、下小松古墳群を特徴づける極小の前方後円墳については、それが、恣意的な企画によるのではなく、一定の形態を目指しているもので、類型分類が可能であることが、測量図を基にした検討の結果、明らかとなった。本稿はこれらの報告である。

また、比較的大規模な薬師沢・鷹待場・小森山支群内に小支群を見出そうと検討を重ねたが、実証資料に不足の観を拭えなかった。

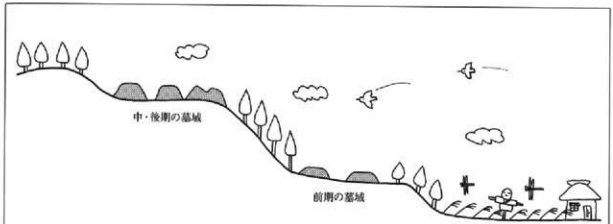
なお、この考察を作成するにあたっては、新井・斉藤・古屋を中心として調査団全体で検討会を行った。本稿はその成果の一部である。ただし、文責についてはそれぞれ明記した者に属する。

（新井　悟）

第2節　古墳の立地

眺山丘陵の全体のなかで、古墳の立地の仕方について、巨視的にみた場合ふたつの在り方があることが注意された。ひとつは、丘陵最高所から緩やかに標高を下げつつ展開する尾根およびその緩傾斜面に立地する古墳であり、もうひとつは前者の尾根の緩やかな下降が盆地際で一旦途絶え、急激な下降をみた後、再び低平な尾根が派生し盆地へといたる、部分に立地する古墳である（第46図）。地形区分と明確に対応したこの2者の関係が、分布調査の過程で問題として浮上していた。

立地によって具体的に古墳を分類すると、低位の丘陵にあるものは、陣が峰支群・永松寺支群・尼が沢支群と鷹待場支群のうちT－41号墳の東側に分布する一群（T－10～17



第46図　下小松古墳群における時期と立地との関係

号墳）である。高位の丘陵にあるものは薬師沢支群・上記を除く鷹待場支群・小森山支群である。

1999年、永松寺支群においてE－1・2・3号墳が川西町教育委員会によって発掘調査され、出土土器からこれらの古墳の築造時期が古墳時代前期にあることが判明した。また2000年には陣が峰支群のJ－1号墳が調査され、出土土器の検討から古墳時代前期の前方後方墳であることが判明した。このことは、下小松古墳群の形成時期が古墳時代前期に遡ることを明らかにしたが、立地差の問題についても、これを解く鍵を与えてくれた。

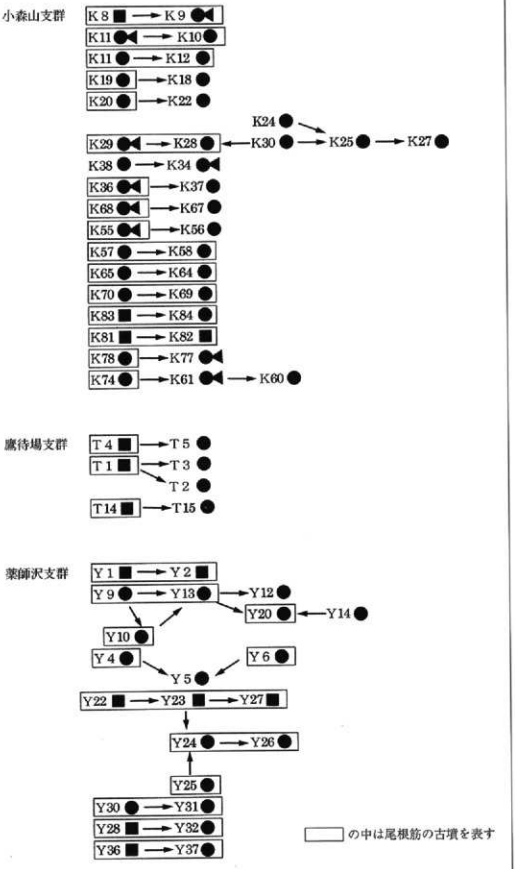
調査された永松寺支群・陣が峰支群は、低位の丘陵に立地するものであった。尼が沢支群と鷹待場支群のうちT－10～17号墳については調査事例がなく依然不明であるが、ふたつの調査事例から、低位の丘陵に分布するものは古墳時代前期に所属し、高位の丘陵に分布するものは古墳時代中・後期に所属するものであるとの見通しを立てるに至った。

下小松古墳群が古墳時代前期から後期に至るまでとぎれることなく連続して築造された古墳群なのか、また丘陵の低位から高位に移行する契機の実際については不明な点が多い。これらの問題解決の作業仮説として、築造時期による立地の違いという問題を提出しておきたい。

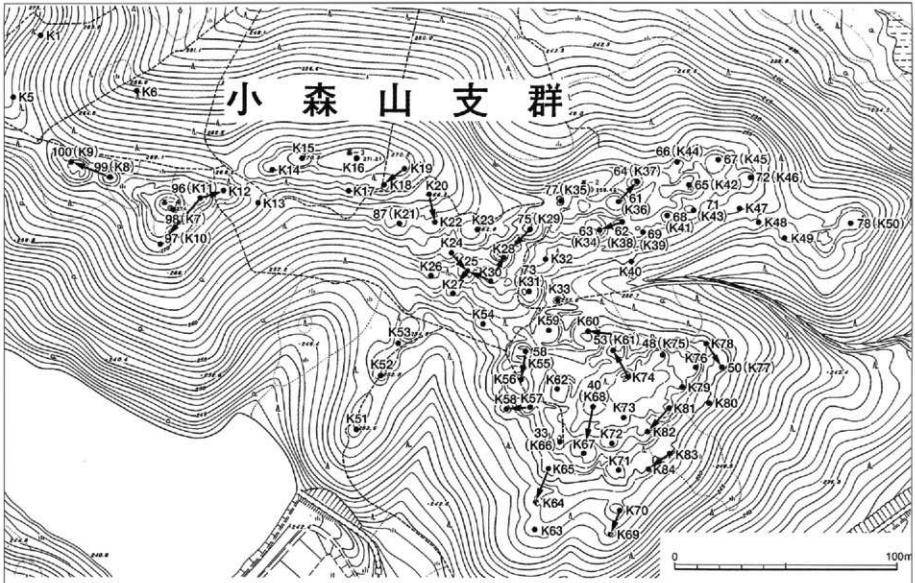
（新井　悟）

第3節　切り合い関係からみた造墓活動の展開

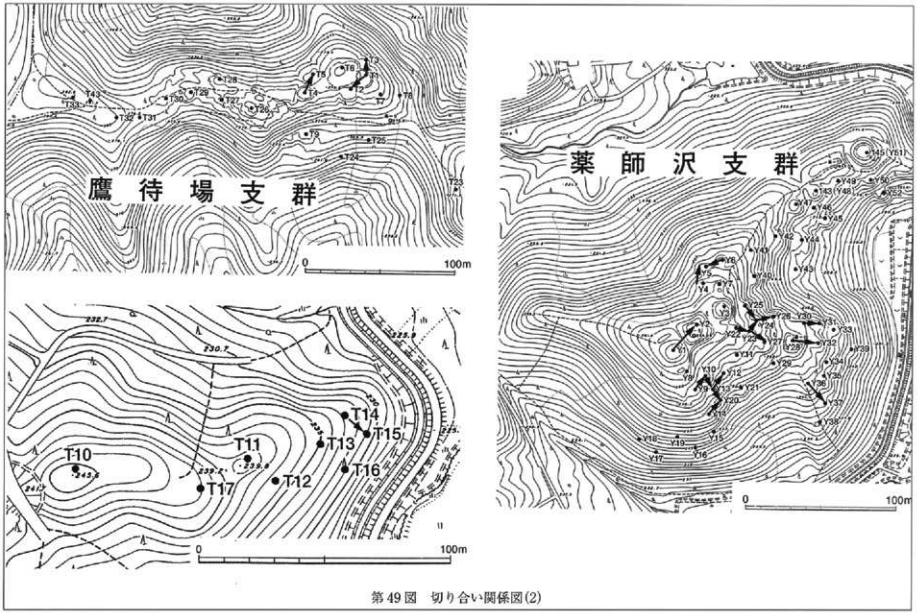
下小松古墳群において、古墳が立地する地形をかなり細かく観察すると、例えば丘陵頂部が平坦な近い状態になっていてもそこに僅かに形成された微細な尾根筋を選んで古墳が立地していることに気が付く。この地形上に築造された古墳の中には、周溝同士、あるいはK－7号墳とK－10号墳にみられるように墳丘同士が切り合い関係をもつものが多数み



第47図　切り合い関係一覧



第48図　切り合い関係図(1)



第49図　切り合い関係図(2)

られる。この古墳自体が切り合う現象そのものがそれ自体考察の対象となることは言うまでもないが、そのことの意義についての解釈はしばらく保留することにしたい。ここでは、この切り合い関係から得られた築造順序の所見をもとにして、微細微地形を利用しながら古墳をどう築造していったかという、造墓活動の展開の仕方についてまとめておきたい。

古墳同士の切り合い関係が観察できた薬師沢・鷹待場・小森山支群におけるそれを一覧表として掲げた（第47図）。これをみると明瞭に読み取れることは、基本的に微細な小尾根筋を利用してその高位から低位に向けて古墳を築造していることである。例えば、小森山支群のK-68号墳が立地する部分は、丘陵頂部が平坦な面となっているが、ここに形成された微細な尾根筋を利用して、K-57⇒K-58、K-65⇒K-64、K-70⇒K-69、のように標高の高い側から低い側へと一様に古墳が展開していることが、その切り合い関係から知れる。またこの尾根筋にそっての展開に限界が来ると、尾根筋からそれる例が見られる。これは薬師沢支群におけるY-14⇒Y-20に見られる関係である。この原理は徹底しているようで、小円墳と前方後円墳においてもこれが認められる。例としてあげられるのは、小森山支群においてK-74という小円墳が築造された後に、K-61という前方後円墳が築造される事例である。また、この事例を適用することができるなら、直接の切り合い関係を持たない例であるが、小森山支群のK-21や鷹待場支群のT-9号墳などの前方後円墳が尾根筋からはずれて、斜面に築造されているのも、理解することが可能である。

以上の展開の仕方をまとめると、その原理は次のように単純である。①尾根筋にそって上から下へ。②築造に充分な空間がない場合、脇にそれる。この二つの原理にそって、下小松古墳群の古墳が展開していることが理解される。

ただし②の脇にそれる、という原理については墓の被葬者の出自関係が理由でおきる場合なども考慮することが必要かもしれない。（新井　悟）

第4節　前方後円墳の類型分類

下小松古墳群では現在20基（小森山支群17基・鷹待場支群3基）の前方後円墳が確認されているが、すべてについて測量調査を終えた。これらの前方後円墳の墳丘形態は一様ではないが、副葬品の乏しい本古墳群の造墓活動を究明する上で、墳丘の平面・立面構造は各々の古墳の時間的あるいは系譜的な指針となる可能性が高い。ここではこれらの前方後円墳の墳丘形態を類型的に分類することで、今後の研究の基礎作業としたい。なお、K-5・T-37・T-32号墳については前方部前端の位置がはっきりしないため、分析対象から除外する。したがって、分析は主に小森山支群の16基を中心として行い、鷹待場支群の1基（T-9号墳）は補足的に言及することにしたい。

なお、分析にあたって前方後円墳の各部位の計測値を資料として使用した。計測値は基

本的に測量図中の傾斜変換線にのっとっているが、撹乱を受けている場合は推定に拠った数値である。また、発掘によって墳裾の正確な位置が判明している古墳もあるが、基準を一定にするために発掘によって得られたデータは採用せず、あくまでも地表面における測量結果に統一した。K-77号墳については山側と谷側でくびれの位置が異なるが、古墳の遺存状況が良くないことから谷側への盛土の流出が考えられるため、山側の傾斜変換線を基準として後円部径を復原した。今回の分析に使用した数値は第4表にまとめた。

第4表　前方後円墳計測表（測量結果による）

古墳名	類型	全 長	後円径	前方幅	前方部長率	前方部幅率
K 9	A	23.3	16.7	6.1	0.40	0.37
K 7	A	26.5	18.0	6.5	0.47	0.36
K 21	A	20.8	15.0	6.5	0.39	0.43
K 31	B	20.3	13.8	6.9	0.47	0.50
K 53	A	21.6	15.4	8.1	0.40	0.52
K 55	B	20.1	13.3	7.4	0.51	0.56
K 68	B	22.9	14.8	6.0	0.55	0.41
K 61	B	22.5	14.3	6.9	0.52	0.48
K 75	B	18.0	11.8	6.4	0.53	0.54
K 77	B	17.8	11.8	5.8	0.59	0.49
K 29	C	21.5	13.0	7.8	0.65	0.60
K 34	B	21.7	13.5	6.3	0.61	0.47
K 36	C	24.7	13.8	8.8	0.79	0.64
K 42	B	22.3	14.5	8.8	0.54	0.61
K 46	C	21.8	13.1	9.4	0.66	0.72
K 50	C	33.8	19.9	12.6	0.70	0.63
T 9	B	19.6	11.8	5.6	0.66	0.47

a．立地の類型と墳丘形態への影響

墳丘の類型分類をする前に、古墳の立地条件が墳丘形態にどのような影響を与えているのかを検討しなければならない。なぜなら墳丘形態が意図的なものである場合に限ってのみ分類する意味があり、またより高次な研究にも使えるからである。

古墳の立地は①尾根の頂部・鞍部および平坦地、②墳丘主軸が斜面にほぼ平行する、③墳丘主軸が斜面に斜交し、前方部を山側にのせる、④墳丘主軸が斜面に斜交し、後円部を山側にのせる、という四つのパターンに分けられる。それぞれのパターンごとに前方部長比率（後円部径を1.0とした時の後円部径に対する前方部の比率：全長÷後円部径－1.0）を列挙すると以下のようになる。

①尾根の頂部・鞍部および平坦地

K－7（0.47） K－9（0.40） K－36（0.79） K－42（0.54） K－50（0.70）
K－53（0.40） K－68（0.55）

②墳丘主軸が斜面にほぼ平行する

K－21（0.39） K－34（0.61） K－77（0.59）

③墳丘主軸が斜面に斜交し、前方部を山側にのせる

K－29（0.65） K－31（0.47） K－46（0.66） K－61（0.52） K－75（0.53）

④墳丘主軸が斜面に斜交し、後円部を山側にのせる

K－55（0. 51）

古墳を作る労力を考えるときに、山側を削出して前方部を作る場合と、平坦地に盛土してつくる場合、どちらが労力削減になるのかはケースによって異なると思われるが、上記の結果を見れば①・③両類型に前方部が長いものと短いものがあることから、墳丘の平面形態は古墳の立地条件に左右されない、意図的なものと判断して良いだろう。しかし、立面形態は立地パターンに左右されているようなので、以下の類型分類では考慮に入れないこととする。

b．前方部幅・長さをもとにした墳丘の類型分類

墳丘の類型は後円部を基準とし、後円部直径に対する前方部の長さ・前方部前端の幅の比率（前方部長比率＝全長÷後円部径－1.0、前方部幅比率＝前方部幅÷後円部径）の相関で設定する。第50図はその二つのデータをもとにしたの散布図であるが、ドットの集まり具合を手がかりにするとおよそ以下に示すような3類型に分類できる。

A：短い前方部を持ち、相対的に後円部の比率が大きいもの。前方部長比率0.39～0.47、前方部幅比率0.36～0.52。

K－7 K－9 K－21 K－53

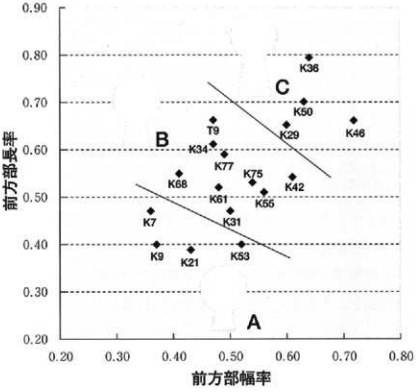
B：前方部がA類型よりも長い一群。前方部長比率0.47～0.66、前方部幅比率0.41～0.61。

K－31 K－34 K－42 K－55 K－61 K－68 K－75 K－77 T－9

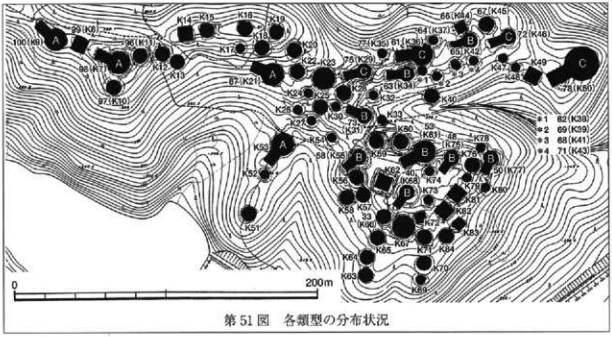
C：前方部が長さ・幅ともに最も大きい一群。前方部長比率0.65～0.79、前方部幅比率0.60～0.72。

K－29 K－36 K－46 K－50

第50図をみるとそれぞれの境界は比較的明瞭であり、明らかに前方後円墳の作り分けが行われていたと言えるだろう。また、小森山支群においてそれぞれの類型の分布（第51図）を見ると、西側の尾根ではA類型（K－7・K－9）のみ、中央の尾根が派生するあたりにはA類型（K－21・K－53）とB類型（K－31）、南東側の平坦面の広い台地上にはB



第 50 図　前方部の形態による類型分類



第 51 図　各類型の分布状況

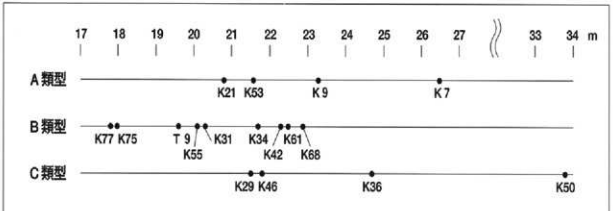
類型（K－55・K－68・K－61・K－75・K－77）のみが、北東の東西に長い尾根ではB類型（K－34・K－42）とC類型（K－29・K－36・K－46・K－50）がそれぞれ立地する。各類型と古墳の立地に明らかな相関関係が認められると言えるだろう。また、西・中央→南東→北東の順に前方部が長くなる傾向も指摘できる。以上の分析からここで得られた墳丘の類型は意図的に企画されたものであり、造墓活動の時間的あるいは系譜的な差を表現していると判断できる。

また、鷹待場支群中のT－9号墳の墳丘形態はB類型に分類できる。鷹待場支群の前方後円墳が独自の形態をとらずに、小森山支群の類型分類のなかに位置付けられることは両支群の形成過程を考える上で重要である。

c．墳丘規模の分析

最後に墳丘規模について分析してみたところ若干の所見が得られた（第52図）。後円部径は各古墳で数値にまとまりがみられないのに対して、墳丘全長の度数分布では約18m、約20～23m、24m以上の3グループに分類できそうである。また、17基中20～23mの規模に11基の古墳が集中することから、墳丘形態の違いを超えたところで、墳丘全長を一致させる約束事が存在したことを示唆している。

（古屋紀之）



第52図　墳丘全長の度数分布

狭　　前方部幅　　広

短

前方部長

長

A類型

K-9

K-7

K-21

K-53

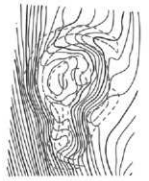
B類型

K-68

K-61

K-31

K-55


T-9

K-34

K-77

K-75

K-42

C類型

K-36

K-50

K-29

K-46

類型外

K-5

T-32

T-37

J-1

第53図　前方後円墳集成図（S＝1／600）

第5節　ま　と　め

以上が、分布調査と前方後円墳の測量調査の結果である。調査の結果をもとに若干の分析作業を試みたが、まだ多くの実証的な作業が必要であることは言うまでもない。今後の調査・研究を継続する中で、さらに詳細な分析作業が可能になると考えている。今回の調査は、下小松古墳群の小森山支群に分布する前方後円墳の測量調査と円墳・方墳の位置関係を中心とする分布調査が主眼であったので、下小松古墳群全体の相互関係にまで、分析作業が及んでいない。調査研究の大きな目的のひとつは、下小松古墳群の各支群間の相互関係、つまり年代と性格の比較研究ということになる。次いで、各支群内の各古墳の築造年代、編年、性格という基礎的な研究がある。この基礎的な資料集成なくしては、古墳群全体を概観することは不可能である。しかしながら、今回の調査によって得られた材料をもとに、若干の分析による作業仮説を、各章の中で提示してみた。

今までの調査によって明らかになった成果と、今次調査によって得られた成果とを合わせてみると、以下のような諸点についての見通しがつけられるようになったのではないかと思っている。すなわち、下小松古墳群は、6支群からなり、合計202基の古墳から構成されている。各支群の古墳構成は第1表に示す如くであるが、前方後円墳17基を含む88基の古墳からなる小森山支群が中心的な存在であることは言をまたない。円墳40基と12基の方墳を含む計52基の古墳からなる薬師沢支群が、また、前方後円墳3基のほか円墳、方墳で合計43基からなる鷹待場支群が有力な支群として存在することが指摘できる。

特筆すべきことは、下小松古墳群の北端にある陣が峰支群中に、前方後方墳1基（J-1号墳）が確認され（註）、後方部頂に3基の土壙が発見されていることである。主体部の調査が実施されていないので、詳細はなお不明とせざるをえないが、墳頂部や墳丘周辺から出土する土師器をみると東北地方では古式の部類に属すると判断されており、下小松古墳群中では、最古の編年的位置が与えられそうである。

また、1987年に調査された薬師沢支群Y-48号墳や、1986年調査の鷹待場支群T-42号墳での銅鏡（Y-48号墳）や古式土師器（T-42号墳）などからみると、下小松古墳群全体は、古墳時代前半期から築造が開始され、支群ごとに先駆的な古墳築造がなされたと解することも、あながち的を外れた考え方ではないように思える。小森山支群に前方後円墳が集中的に築造される背景には、置賜盆地全体の各地方豪族との力関係から生ずる葛藤の中で、多少とも抜きん出た性格を保持しえた結果であったかもしれない。天神森、寶領塚古墳といった二大前方後方墳と稲荷森前方後円墳との適当な立地の距離観は、その間の事情を物語るものではないだろうか。

さて、本報告書の中心的テーマである小森山支群の、前方後円墳を軸とした群構成について若干の私見を述べてみよう。

報文中にあるように、小森山支群にある合計17基の前方後円墳は、後円部と前方部との計測結果による類型分類によってA・B・Cの3類型を考えてみた。この3類型分類によって、古墳の位置関係をみると、＜A＞、＜B＞、＜B・C＞の3群に大別することができ、＜B＞のグループが、支群中の中心的な存在であるように見てとれる。また、＜B・C＞グループが＜A＞グループと対称的に存在し、＜B＞グループを囲むような形であることが読みとれる。報文中にはA・B・Cといった類型による年代的順序関係については論じていないが、円墳・方墳との付属関係からみると＜B＞グループが、小森山支群中では盛期を迎えたグループであったように思える。前方部の方位や方墳の占地位置からみると、K-9・K-8、K-68・K-62、K-42・K-44、K-50・K-49号墳といった位置関係が暗示的である。方墳については、いずれも発掘調査を経ていないから、隣接する各々の前方後円墳との時間的な関係をはじめとする有機的な諸関係が不詳であるが、群構成を考察する場合には前方後円墳と方墳との組合せが基軸となるように思えてならない。

また、前方後円墳の墳丘規模について報文中に示すように、諸類型分類とは関わりなく、その全長が20～23mに集約される傾向があり、とくに大形の前方後円墳がA・C類型にみられ、A・B類型のものの中に20～22m規模のものがあるといった規模のうえでのばらつきも、初期、盛期、終期という段階を表現しているのではないかと想像させる。しかし、こうした動きが、薬師沢、鷹待場支群と、どのように連動しているのかはいまのところ全く不鮮明である。わずかに前方後円墳の数に大きな較差が生じていることが、問題解決の鍵ではないかと考えられるにすぎない。

各支群中における単位支群の分析もまだ模索中であるが、調査による実証資料の不足が大きな要因でもある。

今後も継続して、測量調査と小森山支群以外の各支群については発掘調査を実施して、下小松古墳群の全体像を把握するように努力したいと思っている。

（小林三郎）

註　『下小松古墳群陣が峰支群発掘調査概報』川西町教育委員会　2001年

写真図版

pl.1　K－5号墳

pl.2　K－7号墳

pl.3　K－9号墳